

2016(平成28)年度

障害者スポーツの振興と強化に関する 調査研究報告書

- テレビ放送、選手認知度、大学による支援に注目して -

はじめに

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団
調査研究・担当理事 浅見俊雄

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団は2006（平成18）年11月に設立され、翌2007（平成19）年度から事業開始した財団で、主たる事業であるスポーツの実践者およびスポーツ医・科学などの研究者として世界の第一線で活躍しようとしているチャレンジャーをサポートする助成事業では、本年2017（平成29）年4月に第11期生を迎える。この個人への研究・体験助成と並行し、財団独自で日本のスポーツの一層の振興と発展に寄与できるような調査研究する組織を2012（平成24）年度から立ち上げ、日本の障害者スポーツに関する社会学的な調査研究等を進めてきた。

この報告書は、2016（平成28）年の「障害者スポーツの振興と強化に関する調査研究－テレビ放送、選手認知度、大学による支援に注目して－」という研究成果をとりまとめたものである。

第1章でこれまでの4年間に実施してきた調査報告のまとめを行うとともに、今後の研究の方向性や、課題についての検討を短くまとめている。

第2章では、2016（平成28）年に開催されたリオ2016パラリンピックにおけるテレビメディア等でのパラスポーツに関する情報発信が急激に増大したことに関して、(株)エム・データからのデータ提供を受けて、北京、ロンドン、リオの3つのパラリンピック大会の比較を含めて、「テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査」と題して、多くの図表を使ってリオ2016パラリンピックでのテレビ放送が格段に拡大した実態を報告している。

第3章では、「パラリンピアンに対する社会的認知度調査」の結果を報告している。インターネット調査による2,060人の回答からの分析では、テレビメディアでの露出は多くなっているとはいえ、競技者の認知度では、まだ健常者とは大きな差のあることが認められた。

第4章では、最近取り組みを始められた大学でのパラリンピアンへの支援について、オリンピックと同様にパラリンピアンへの直接的な支援も始めた日本体育大学と、日本身体障がい者水泳連盟と協定を結んで、プールの利用をパラリンピアンに提供しているなどの間接的支援を始めている立教大学へのインタビュー調査の内容が報告されている。

最後に、2016（平成28）年11月に東京で行われた、当財団主催のシンポジウム「障害者スポーツ選手発掘・育成システムのモデル構築に向けて」の内容が報告されている。

なお、これとは別冊で同じく本年度に取り組んだ『「トップスポーツ」の持続可能なシステム構築に向けた探索的調査1－ジャパンラグビートップリーグに着目して－』の報告書も発行されるので、本報告書と併せてご利用いただきたい。

■目次

はじめに	1
第1章	
障害者スポーツ・プロジェクトの活動経過と今後の課題	
1 障害者スポーツ・プロジェクトの調査研究経過	6
2 平成28年度の調査研究について	9
3 今後の課題について	11
第2章	
テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査	
調査概要	14
要約	15
調査報告	17
1 メディア放送時間 単純集計	18
2 メディア放送時間 クロス集計	22
3 リオ2016パラリンピック日本代表選手別の放送時間	28
4 まとめ	29
第3章	
パラリンピアンに対する社会的認知度調査	
調査概要	32
要約	33
調査報告	35
1 パラリンピアンの認知度	36
2 パラリンピックの観戦	37
3 障害者スポーツとの接点	40
4 クロス集計	43
5 まとめ	47

第4章

大学における障害者スポーツ現状インタビュー

- 1 インタビュー 日本体育大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
- 2 インタビュー 立教大学・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
- 3 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

第5章

シンポジウム 2016「障害者スポーツ選手発掘・育成システムのモデル構築に向けて」

- シンポジウム抄録集・・・・・・・・・・・・・・・・・・62

- あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・69

- 附録1 パラリンピアンに対する社会的認知度調査 調査票・・・・・・・・・・71

- 附録2 パラリンピアンに対する社会的認知度調査 集計表・・・・・・・・・・79

■障害者スポーツ・プロジェクト

リーダー	藤田紀昭	日本福祉大学スポーツ科学部	教授
委員	浅見俊雄	東京大学・日本体育大学 (公財) ヤマハ発動機スポーツ振興財団	名誉教授 理事
	小淵和也	(公財) 笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所	研究員
	河西正博	びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部	専任講師
	齊藤まゆみ	筑波大学体育系	准教授
	中森邦男	(公財) 日本障がい者スポーツ協会強化部 日本パラリンピック委員会	部長 事務局長
事務局	大庭義隆	(公財) ヤマハ発動機スポーツ振興財団	常務理事
	尾鍋文光	(公財) ヤマハ発動機スポーツ振興財団	

2017（平成29）年3月31日現在



第1章

障害者スポーツ・プロジェクトの活動経過と 今後の課題

1. 障害者スポーツ・プロジェクトの調査研究経過

(公財) ヤマハ発動機スポーツ振興財団(以下、当財団)は、スポーツ文化・啓発事業において調査研究委員会を設立し2012(平成24)年より障害者スポーツにかかわる実態調査を実施してきた。今年度(2016(平成28)年)から調査研究委員会を発展的解消し、新たに障害者スポーツとトップスポーツの二つのテーマごとにプロジェクトを立ち上げた。本報告書はそのうちの障害者スポーツ・プロジェクトによるものである。

本プロジェクトでは、これまで「大学における障害者スポーツの現状」、「パラリンピアンをはじめとした障害者スポーツ選手の実態やスポーツキャリアに関する調査」、「パラリンピアンへの社会的認知度に関する調査」を実施し、障害者スポーツ発展のための基礎資料を提供してきた。なお、障害者スポーツに関するこれまでの調査経過は下表に示すとおりである。

2016(平成28)年11月5日には2015(平成27)年度「障害者スポーツ選手発掘・育成システムのモデル構築に向けた基礎的調査研究」の結果報告を受け「障害者スポーツ選手発掘・育成システムのモデル構築に向けて」と題したシンポジウムを開催した。調査の結果報告ののち、齊藤まゆみプロジェクト委員をコーディネーターとし、リオ2016パラリンピックで活躍した辻沙絵選手(陸上競技/日本体育大学)、一ノ瀬メイ選手(水泳競技/近畿大学)、ボッチャの銀メダル獲得に貢献した村上光輝日本代表ヘッドコーチ、一般社団法人日本パラ陸上競技連盟の三井利仁理事長にご登壇いただき、ご講演とディスカッションを行った。選手強化のために必要な諸施策を選手、指導者、競技団体それぞれの立場からご発言いただき大変有意義なシンポジウムとなった。

	2012(平成24)年度	2013(平成25)年度	2014(平成26)年度	2015(平成27)年度	2016(平成28)年度
大学における障害者スポーツの現状	○		○		○
パラリンピアンをはじめとした障害者スポーツ選手の実態やスポーツキャリアに関する調査		○			
パラリンピック指導者の現状に関する調査		○			
パラリンピック競技団体活動調査		○			
障害者スポーツ選手発掘・育成システムの現状と今後の方向性に関するヒアリング調査			○		
パラリンピアンへの社会的認知度に関する調査			○		○
障害者スポーツ選手のスポーツキャリアに関する調査				○	
パラリンピックのテレビ放送状況に関する調査					○

年度	調査テーマ	主な調査結果
2012 (平成 24)	大学における障害者スポーツの現状調査	<ul style="list-style-type: none"> ・入学制度、スポーツ施設、研究、選手強化、コーチ養成など障害者や障害者スポーツを想定している体育、スポーツ系学部は非常に少ない。
2013 (平成 25)	パラリンピアン、指導者、競技団体の現状調査	<ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピアン：友人、トップ選手、指導者、先輩等の影響を受けて競技を開始。週 4-5 日、公共スポーツ施設や障害者スポーツセンターで練習する人が多い。職務や学業を調整し練習、合宿、試合に参加。経費の多くを自己負担。 ・指導者：長期欠勤、休業となる海外遠征などの帯同は難しい。経費の多くは自己負担。 ・競技団体：登録者数が少なく経済面、人材面等、非常に脆弱。
2014 (平成 26)	<ul style="list-style-type: none"> ・前年調査の 2 次分析 ・パラリンピアンの社会的認知度調査 ・大学調査(2 回目) 	<ul style="list-style-type: none"> ・年少期(0-12 歳)で障害を負った人の学校期のスポーツ不参加率が高い。 ・先天性障害者がスポーツを実施する要因として学校、家庭の影響が大きい。 ・メダリストの社会的認知度はオリンピックで平均 40.7%、パラリンピアンで 3.5%。 ・メディア観戦率はロンドンオリンピック 83.9%、ロンドンパラリンピック 58.2%。ソチオリンピック 84.5%、ソチパラリンピック 58.0%。 ・大学調査の結果は 2 年前とほぼ同じ。障害者スポーツへの関心は低調。
2015 (平成 27)	障害者スポーツ選手のスポーツキャリア調査	<ul style="list-style-type: none"> ・練習頻度：週 2-3 回および週 4-5 回実施する選手が多い。練習時間：1 時間半から 2 時間程度の選手が多い。 ・先天性障害の人は小中高と進むにつれ特別支援学校に行く割合が高くなるが、依然多くの障害児が普通学校にも在学している。 ・身体障害(中途障害)は、体育に参加できないことが他に比べて多い。 ・知的障害は小中高と「ほぼ参加」の率が上がるが、肢体不自由児が体育に参加するのに困難がみられる。 ・スポーツを始めるに際して、先天性障害者は学校関係者、家族の影響を受けていることが多く、中途障害者はコメディカルやスポーツ関係者の影響を受けていることが多い。 ・受傷・発症前のスポーツ経験は受傷・発症後のスポーツ開始に好影響を与えている場合が多い。

さて、2016（平成 28）年 9 月にブラジルのリオデジャネイロでパラリンピック夏季大会が開催された。日本は銀 10、銅 14 とメダル獲得数では前回のロンドン大会を上回ったものの、金メダルは 0。金メダル獲得数を優先させる国別メダル獲得順位は 64 位と前回の 24 位を大きく下回った。本プロジェクトは調査研究を通して、パラリンピックを中心とした障害者スポーツの振興を目指しているが、競技力向上においては、まだ道は険しく遠い、というのが正直な印象である。

しかし、東京 2020 パラリンピック開催が決定して以降、障害者スポーツに対する注目度は上がり、選手強化に向けた制度が整備され、それに伴う予算も大幅に増加しているのも事実である。こうした気運を生かし、東京 2020 そしてその後の障害者スポーツの持続的な振興の在り方を調査研究によるデータをもとに探ると同時に、スポーツ界最大のプロジェクトであるオリンピック、パラリンピックの国内開催が人々に及ぼす影響を調査によるエビデンスによって記録していきたいと考えている。

2. 平成 28 年度の調査研究について

昨年度（2015（平成 27）年）の報告書において、今後の調査研究の方向性として次の 3 つのことを示した。

- ①これまでの調査研究の追跡的・経年的な定点観測を継続実施
- ②障害者のスポーツへの社会化の調査を深化
- ③新たな課題に関する調査

①については、今年度「大学における障害者スポーツの現状」および「パラリンピアン
の社会的認知度」の二つの調査を実施した。

「大学における障害者スポーツの現状」に関しては、2012（平成 24）年度と 2014（平成 26）年度は同じテーマで、ほぼ同様の内容のアンケート調査を実施した。しかしながら、障害者スポーツに取り組む大学が若干増えている傾向はみられたものの、結果に大きな変化はみられなかった。また、回答した大学の数も非常に少なかった。前回調査（2014 年）以降、障害者スポーツ研究に組織的に取り組む大学が散見されるようになった（東京大学や広島大学など）。しかしながら、大学の障害者スポーツ関連教員の募集状況などからみて全国的に大きな変化が生起しているとは考えられない。そこで今年度（2016（平成 28）年）は障害者スポーツに関して特徴的な取り組みを行っている二つの大学を対象とした事例研究を実施することにした。

一つは立教大学で、一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟と連携し、大学スポーツ施設であるプールを 2014（平成 26）年から障害のある選手たちに貸し出している。立教大学の将来ビジョンの中で「東京オリンピック・パラリンピックプロジェクトの推進」を柱の一つとして挙げている。もう一つの大学は日本体育大学である。次世代の若手選手を発掘し、東京 2020 パラリンピックを見据えて 50 人のパラアスリートの養成を目指している。学費・生活費のほか、経費のかかる遠征費を支援するため、障害者スポーツに特化した奨学金制度を 2017（平成 29）年度から設ける。その規模は 10 億円で、公益財団法人日本財団からの支援を受けることになっている。

このように両大学は我が国の大学の中でも障害者スポーツに関して先進的な取り組みを行っている。今回はこうした事業を展開するに至った経緯と大学事業の中における位置づけ、今後の展開などについてインタビューを実施した。

もう一つは「パラリンピアン
の社会的認知度」に関する調査である。ソチ 2014 冬季パラリンピック後にも同様の調査を実施している。結果は、平均認知度 3.5% と非常に低かった。リオ 2016 パラリンピックはこれまで以上に新聞報道やテレビ放送、インターネットを通じた競技ニュースなどの配信が行われたが、パラリンピアン
の社会的認知度に変化がみられたかどうかを確認するための調査を実施した。

②については 2013（平成 25）年度から 2015（平成 27）年度まで関連の調査を実施してきていること、また、パラリンピック開催年には一般社団法人日本パラリンピアンズ協会が選手、指導者の現状調査を実施することから今年度（2016（平成 28）年）は実施しな

った。

③については今年度（2016（平成 28）年）、パラリンピックのテレビ放送に関する調査を新たに実施した。これまでパラリンピックの新聞報道に関する調査研究はいくつか行われてきている。しかし、テレビ放送、とりわけ放送量に関して実施された調査研究はない。したがって本調査は、我が国のパラリンピックのテレビ放送に関する画期的な調査研究といえる。今回利用したテレビ放送調査会社（株式会社エム・データ：本社東京）には北京 2008 パラリンピック以降のデータが残されていることが確認され、北京 2008 パラリンピック、ロンドン 2012 パラリンピックとリオ 2016 パラリンピックのテレビ放送量の比較検討を行うことができた。さらにパラリンピアン認知度調査と合わせて、テレビ放送の影響を測ることを試みた。

3. 今後の課題について

次年度（2017（平成29）年）以降も①これまでの調査研究の追跡的・経年的な定点観測を継続実施、②障害者のスポーツへの社会化の調査を深化、③新たな課題に関する調査の基本指針は変わらない。実際に次年度以降どのような研究を進めていくかは今後検討する予定である。考えられるものとしては「大学における障害者スポーツの現状のインタビュー調査」の継続、これに関しては時機をみてアンケート調査を実施することも考えられる。「テレビ放送」に関しては、今年度は量的把握を行った。今後は量的把握を定点的に実施していくとともに放送の内容（質）に関する分析を行うことが考えられる。

障害のある人がどのようにスポーツを実施するようになるか、すなわち「障害者のスポーツへの社会化」に関しては障害ごとに、先天性障害と中途障害、性別などに類型化したうえでインタビュー調査を行い、障害者スポーツ選手のキャリアパスについて明らかにしていくことが必要であろう。

競技団体については、国からの強化予算が増額されたり、強化拠点事業が軌道に乗ったり、パラリンピックサポートセンターを利用できるようになるなど各種の側面的支援により強化基盤が充実しつつある。しかしながら2020年以降のことを楽観視するわけにはいかない。ここ数年、急激な変化をみせている競技団体、選手強化の現状を把握しておくためにも、現在の強化体制（組織、指導者、予算等）がどのようになっているのか、東京2020パラリンピックでのメダル獲得見通しはどのようになっているのかということに加え、東京2020以降についてどのようなビジョンを持って強化に当たっているのか、また強化事業を東京2020以降も継続可能なものにするためにはどのような支援が必要なのか、そのための競技団体としての課題は何かについて調査研究する必要があると思われる。また、企業の現況等について折をみて把握する必要があるだろう。

継続的な選手強化においては地域における選手の発掘が不可欠である。選手発掘、障害者スポーツ振興等が地域レベルでどのように行われているのかも研究課題の一つといえよう。いずれにしても、全国レベルでみたマクロな視点、地域レベルでみる視点、選手個人に焦点を合わせたミクロな視点、いずれも障害者スポーツの現況、強化の在り方を探るうえで重要である。これらのことを踏まえ、今後の調査研究を考えていきたい。

また、新たな研究テーマとしてアジアを中心とした諸外国とりわけ途上国の障害者スポーツの実態に関する調査をあげておく。日本が障害者スポーツの分野でリーダーとして国際貢献していく方法として、パラリンピック等国际大会で高い競技力を示し、他国の範となることは重要である。しかしこれだけが国際貢献の方法ではない。途上国等での障害者スポーツの普及や指導者の養成、指導方法の伝授等に積極的に取り組むことはアジアのリーダーとしてぜひやるべきことだし、こうした国々での障害者の自立やスポーツ文化の享受という点からみても意義あることである。そのための基礎的な調査は重要である。マンパワーや予算の制約があるため実現できるかどうかはわからないが、こうした研究テーマも視野に入れておきたい。

最後に、本プロジェクトでは毎年調査研究結果を広く社会に発信し、障害者スポーツの振興に生かすために報告書の刊行、シンポジウムの開催などを行っている。今後もこうし

た事業を行うことで当財団が目指す「我が国におけるスポーツ振興とスポーツ文化の向上」に資していきたいと考えている。そのためには調査研究報告書の内容に、よりたくさんの人に注目していただき、シンポジウムの内容に関しても、できるだけたくさんの方の目に触れるようにするにはどうすればよいのか、研究結果の公表方法の改善という点にも関心を持ち、調査研究を進めていきたい。

(藤田紀昭)

第2章

テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信 環境調査

調査概要

(1) 調査目的

リオ 2016 パラリンピックの開催にあわせ、障害者スポーツの各種マスメディア（テレビ・新聞など）での露出状況（量的、番組傾向、トピックスなど）を把握し、影響度や障害者スポーツの社会的認知度との相関を図ることを目的とする。

(2) データ抽出内容

放送日時、テレビ局、番組名、放送時間帯、開始時刻、終了時刻、番組カテゴリー、番組内コーナーなどの項目でデータを抽出する。

(3) データ抽出条件

東京都内での地上波デジタル（メインのみ）の放送環境を有するテレビ局の東京エリア放送分のデータをもとに、検索対象ワードとして、①「パラリン」、②「障害」AND「スポーツ」、③「障がい」AND「スポーツ」の3条件を設定した。①について、「パラ」と設定した場合、パラリンピック関連以外のワードが大量に対象となってしまうために、本調査では、「パラリンピック」「パラリンピアン」のいずれかのワードが対象となるように、「パラリン」を検索対象ワードに設定した。なお、対象となったデータ件数は以下のとおりである。

	①「パラリン」	②「障害」AND「スポーツ」	③「障がい」AND「スポーツ」
北京大会	1,024 件	59 件	1 件
ロンドン大会	1,739 件	25 件	1 件
リオ大会	3,336 件	51 件	17 件

(4) データ抽出期間

	開催前(31 日間)	開催中(12 日間)	開催後(31 日間)
北京大会	2008/8/6～2008/9/5	2008/9/6～2008/9/17	2008/9/18～2008/10/17
ロンドン大会	2012/7/29～2012/8/28	2012/8/29～2012/9/9	2012/9/10～2012/10/9
リオ大会	2016/8/7～2016/9/6	2016/9/7～2016/9/18	2016/9/19～2016/10/18

(5) データ提供社

株式会社エム・データ (M Data CO.,LTD)
住所：東京都港区虎ノ門 1-16-16 虎ノ門一丁目 MG ビル 9F
TEL：03-3519-7060 URL：http://mdata.tv

(6) 集計・分析

株式会社サーベイリサーチセンター 調査事務局
住所：東京都荒川区西日暮里 2-40-10
TEL：03-3802-6775 URL：http://www.surece.co.jp/

要約

- ◆ 北京 2008 パラリンピック（以下、北京大会）、ロンドン 2012 パラリンピック（以下、ロンドン大会）、リオ 2016 パラリンピック（以下、リオ大会）の放送時間は、北京大会が 56 時間 45 分 18 秒、ロンドン大会が 78 時間 14 分 15 秒、リオ大会が 234 時間 36 分 59 秒と、リオ大会は北京大会との比較で約 4 倍の放送時間であった。
- ◆ 大会の「開催前」「開催中」「開催後」の放送時間をみると、リオ大会は、「開催前」では北京大会との比較で約 4 倍の増加、「開催中」では、北京大会との比較で約 2 倍の増加、「開催後」では、北京大会との比較で約 9.5 倍の増加となった。
- ◆ 地上波テレビ放送局（以下、テレビ局）別の放送時間は、「NHK 総合」（129 時間 6 分 58 秒）が最も多く、ついで、「NHK 教育」（73 時間 13 分 35 秒）、「TBS」（56 時間 27 分 1 秒）であった。大会別に 20 時間以上放送しているテレビ局は、北京大会、ロンドン大会では「NHK 総合」「NHK 教育」の 2 局、リオ大会では「NHK 総合」「日本テレビ」「TBS」「フジテレビ」「テレビ朝日」の 5 局であった。「NHK 総合」でのリオ大会の放送時間が、北京・ロンドン大会との比較で約 4 倍の 80 時間以上に急増したのが特徴的であった。
- ◆ 番組カテゴリー別の放送時間は、「情報／ワイドショー」（110 時間 18 分 20 秒）が最も多く、ついで、「ニュース／報道」（104 時間 2 分 4 秒）、「スポーツ」（92 時間 18 分 43 秒）であった。「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」「ドキュメンタリー」「バラエティー」での放送時間が北京・ロンドン大会からリオ大会で急増した。「スポーツ」の放送時間は、ロンドン大会、リオ大会でほとんど変化はなかった。
- ◆ テレビ局の番組カテゴリー別に 10 時間以上放送したのは、北京大会は「NHK 教育」の「スポーツ」、ロンドン大会は「NHK 総合」と「NHK 教育」の「スポーツ」、リオ大会は、「NHK 総合」の「ニュース／報道」「スポーツ」、「日本テレビ」の「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」、「TBS」の「情報／ワイドショー」、「フジテレビ」の「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」、「テレビ朝日」の「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」であった。リオ大会における「TBS」の「情報／ワイドショー」が 30 時間を超えたのが特徴的であった。
- ◆ 番組内で取り上げられたコーナー別の放送時間は、「スポーツ」（224 時間 19 分 50 秒）が最も多く、ついで、「政治・国際」（86 時間 2 分 11 秒）、「暮らし」（34 時間 45 分 3 秒）であった。北京大会、ロンドン大会でほとんど取り上げられなかった「政治・国際」の放送時間が、リオ大会で 80 時間以上に急増した。要因は、リオ大会前に話題になったロシアのドーピング問題に関する報道であった。

調查報告

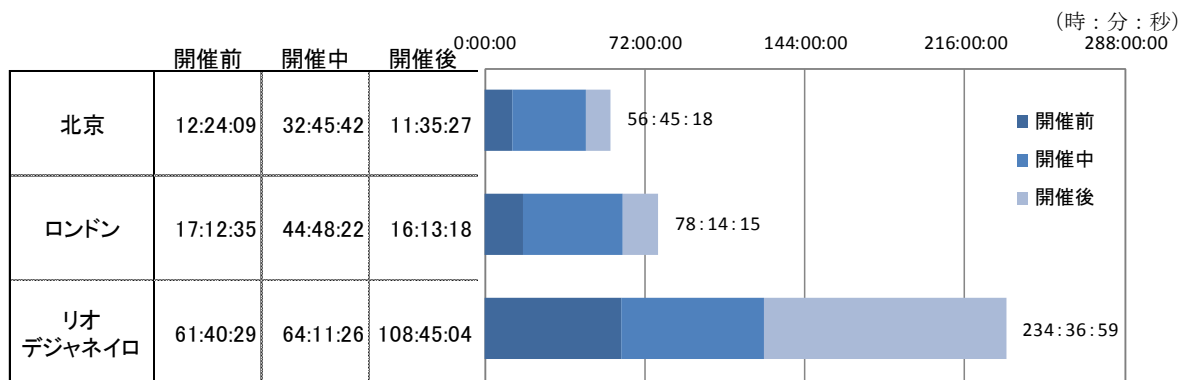


1. メディア放送時間（単純集計）

北京大会、ロンドン大会、リオ大会の地上波テレビ放送をパラリンピックの開催前 1 ヶ月、開催中、開催後 1 ヶ月でみると、3 大会の合計放送時間は、369 時間 36 分 32 秒であった。

1) 過去 3 大会の放送時間の変遷

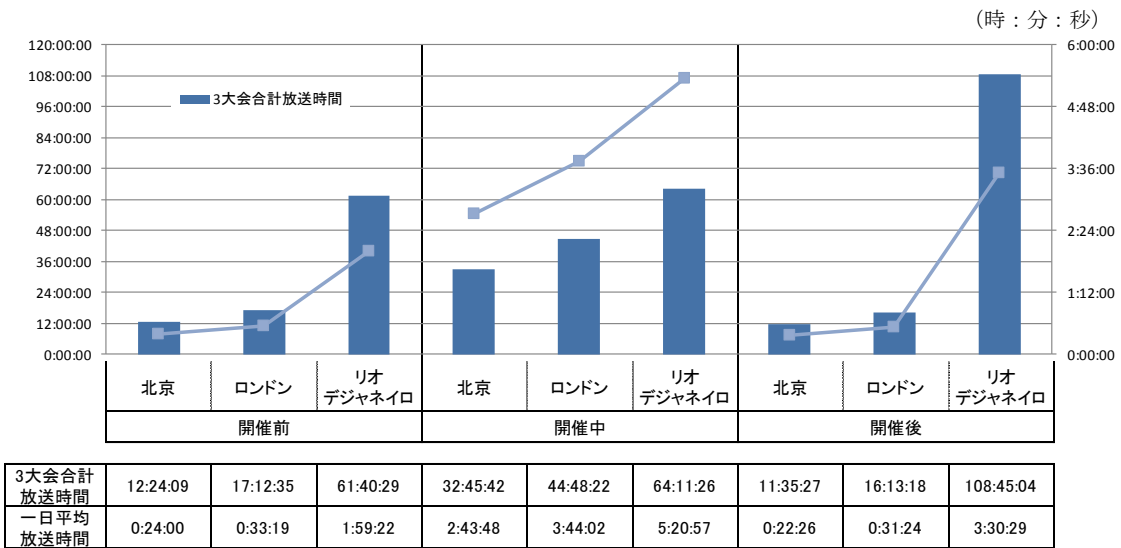
大会ごとでは、北京大会が 56 時間 45 分 18 秒、ロンドン大会が 78 時間 14 分 15 秒、リオ大会が 234 時間 36 分 59 秒と、リオ大会では、北京大会の約 4 倍の合計放送時間となった(図表 2-1)。「開催前」「開催中」「開催後」にわけて、過去 3 大会の放送時間をみると、いずれの期間ともリオ大会が最も多かった。



図表 2-1 過去 3 大会の放送時間

2) 開催前・開催中・開催後別の放送時間

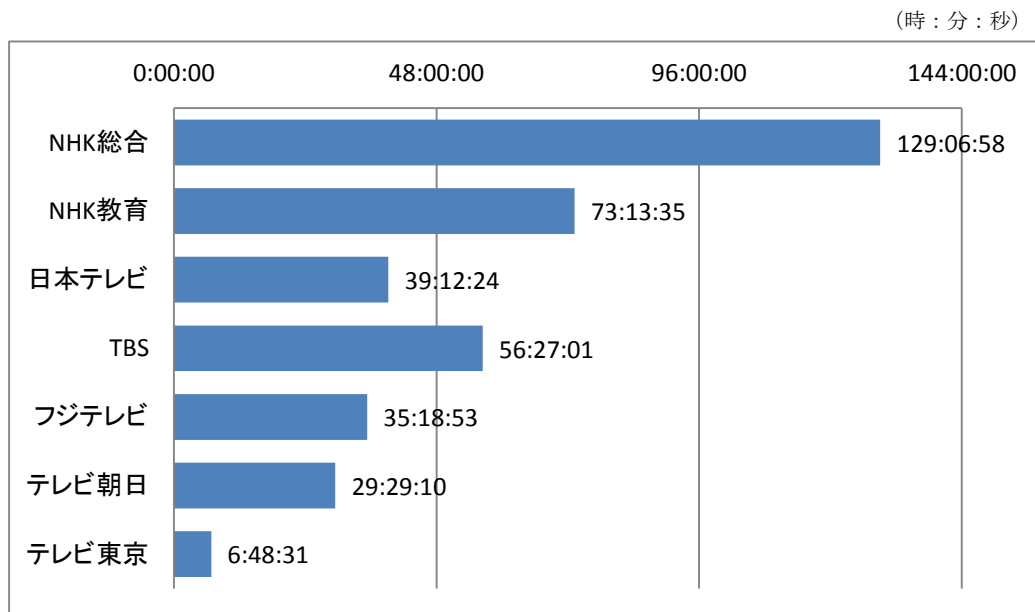
パラリンピックの「開催前」「開催中」「開催後」にわけて、合計放送時間と一日平均放送時間についてみた(図表 2-2)。「開催前」「開催後」は 31 日間、「開催中」は 12 日間として、一日平均放送時間を算出した。「開催前」は、北京大会からロンドン大会にかけて一日平均放送時間は微増であったが、リオ大会にかけて、24 分から 1 時間 59 分 22 秒と約 4 倍増であった。「開催中」は、北京大会からリオ大会にかけて倍増した。「開催後」では、北京大会からロンドン大会にかけては微増であったが、リオ大会にかけて、22 分 26 秒から 3 時間 30 分 29 秒と約 9.5 倍増となった。



図表 2-2 大会開催前後の放送時間

3) テレビ局ごとの放送時間

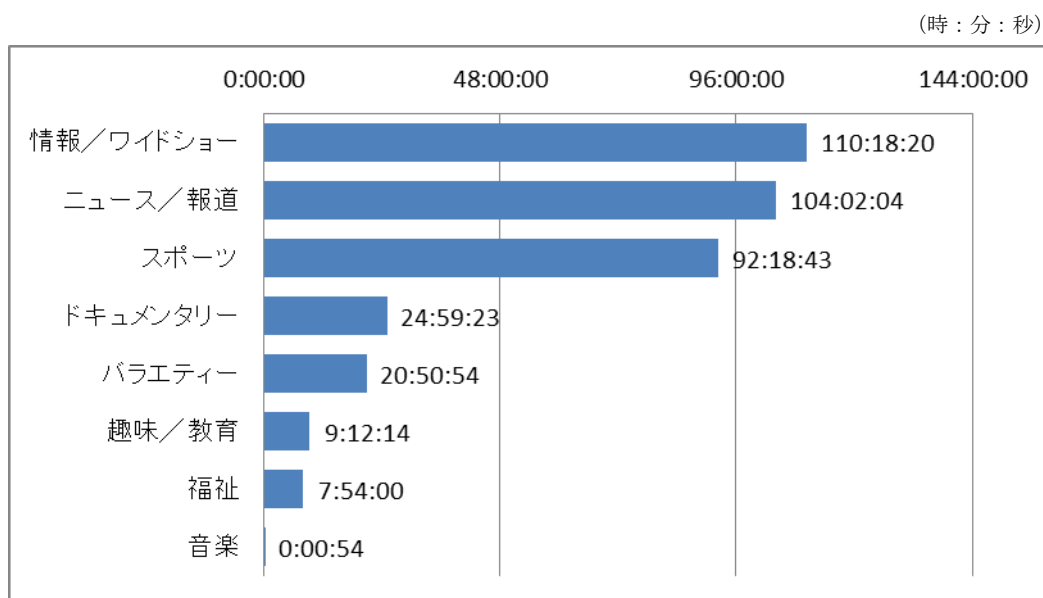
テレビ局ごとに放送時間についてみると、「NHK 総合」が 129 時間 6 分 58 秒と最も多く、ついで、「NHK 教育」の 73 時間 13 分 35 秒、「TBS」の 56 時間 27 分 1 秒であった(図表 2-3)。



図表 2-3 テレビ局の放送時間(過去 3 大会合計)

4) 番組カテゴリー別にみる放送時間

番組カテゴリー別に放送時間をみると、最も放送している番組カテゴリーは「情報／ワイドショー」(110時間18分20秒)で、ついで、「ニュース／報道」(104時間2分4秒)、「スポーツ」(92時間18分43秒)であった(図表2-4)。



図表 2-4 番組カテゴリー別にみる放送時間(過去3大会合計)

注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース／報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

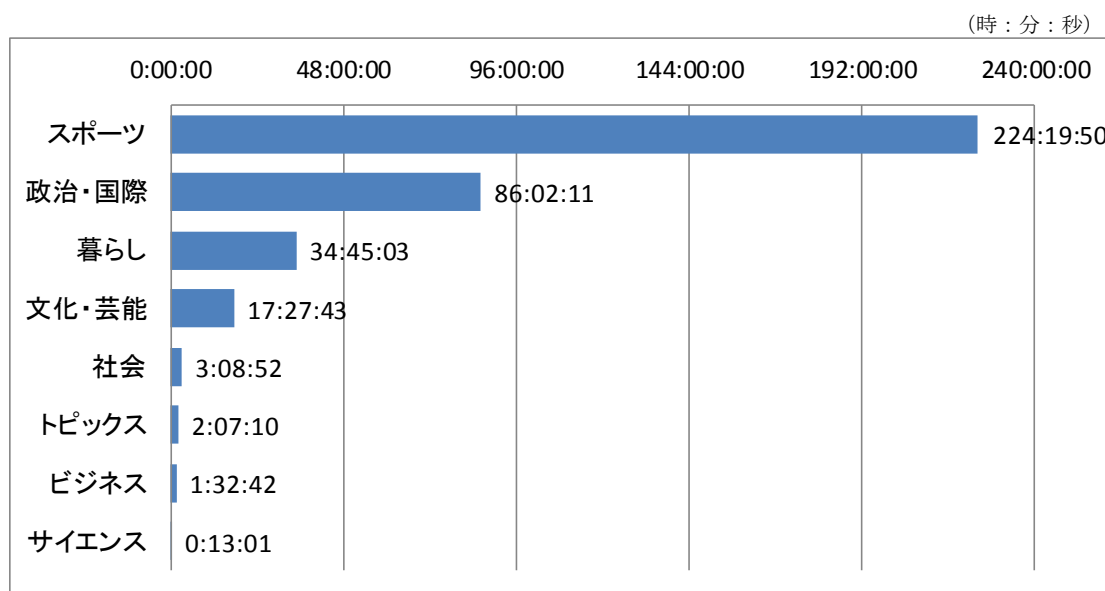
参考までに、番組カテゴリー別に番組名をまとめると、図表2-5のとおりである。

番組カテゴリー	『番組名』(テレビ局名)
情報/ワイドショー	『スッキリ!!(日本テレビ)』『ZIP!(日本テレビ)』 『みのもんたの朝ズバ!!(TBS)』『ひるおび!(TBS)』 『めざましテレビ(フジテレビ)』『直撃LIVEグッディ!(フジテレビ)』 『ワイド!スクランブル(テレビ朝日)』など
ニュース/報道	『おはよう日本(NHK)』『ニュースウオッチ9(NHK)』 『NEWS ZERO(日本テレビ)』『news every.(日本テレビ)』 『Nスタ(TBS)』『みんなのニュース(フジテレビ)』 『グッド!モーニング(テレビ朝日)』など
スポーツ	『サンデースポーツ(NHK)』『Going! Sports & News(日本テレビ)』 『S☆1(TBS)』『スポーツLIFE HERO'S(フジテレビ)』 『Get Sports(テレビ朝日)』『SPORTSウォッチャー(テレビ東京)』など

図表 2-5 番組カテゴリー別にみる主なテレビ番組

5) 番組内コーナー別にみる放送時間

番組内で取り上げられたコーナー別に放送時間についてみると、最も取り上げられることが多かったコーナーは「スポーツ」(224時間19分50秒)で、ついで、「政治・国際」(86時間2分11秒)、「暮らし」(34時間45分3秒)であった(図表2-6)。



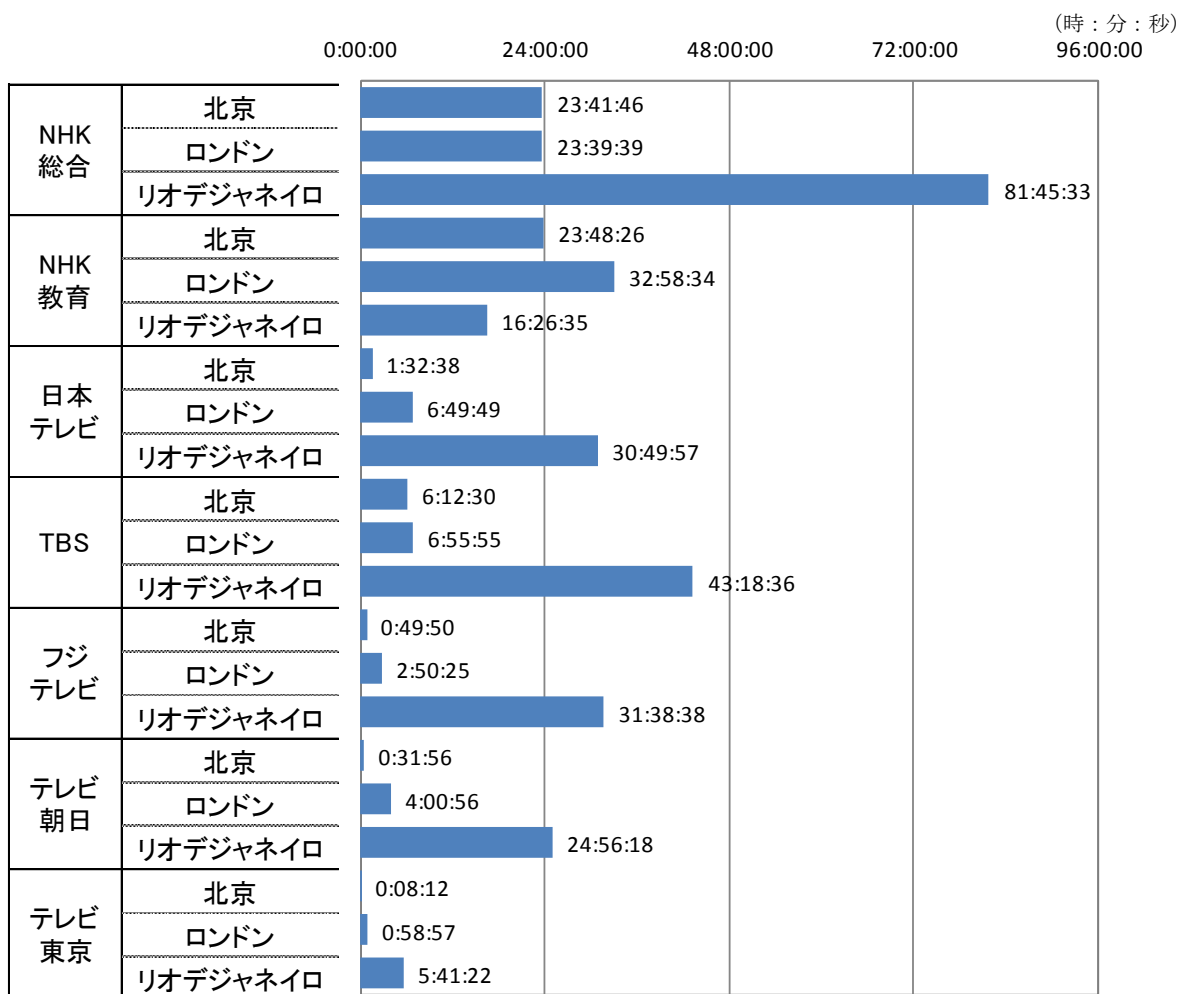
図表 2-6 番組内コーナー別にみる放送時間(過去3大会合計)

注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース／報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

2. メディア放送時間（クロス集計）

1) テレビ局ごとにみた3大会の放送時間

テレビ局ごとに3大会の放送時間をみると、「NHK 教育」以外のテレビ局では、リオ大会が最も多かった（図表 2-7）。20 時間以上放送したテレビ局を大会別にみると、北京大会、ロンドン大会では「NHK 総合」「NHK 教育」の2 局、リオ大会では「NHK 総合」「日本テレビ」「TBS」「フジテレビ」「テレビ朝日」の5 局であった。また、「NHK 総合」の放送時間が、北京大会、ロンドン大会からリオ大会では約4 倍の80 時間以上に急増したのが特徴的であった。

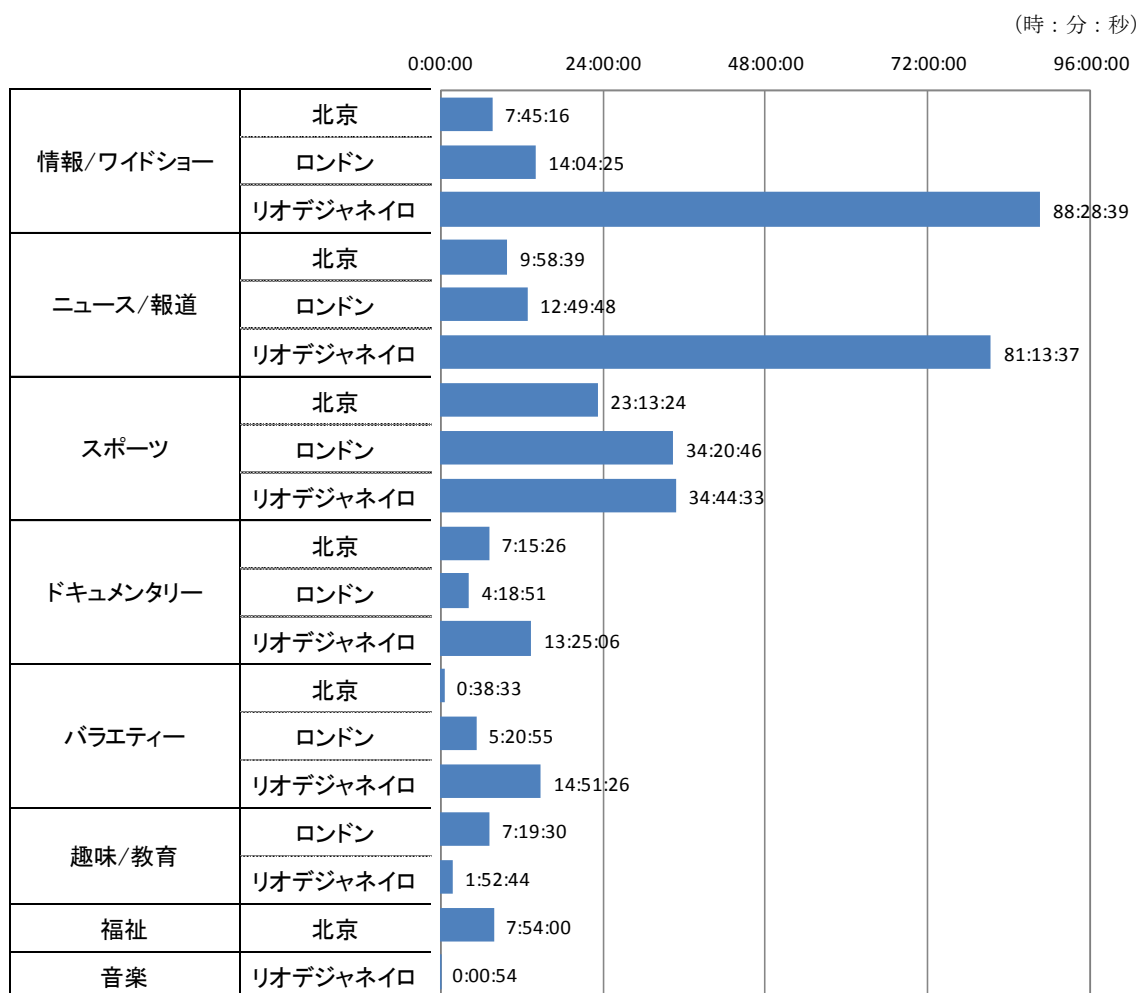


図表 2-7 テレビ局別にみる大会別放送時間

2) 番組カテゴリー別にみる3大会の放送時間

番組カテゴリー別に3大会の放送時間をみると、「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」「ドキュメンタリー」「バラエティー」での放送時間がリオ大会で急増した一方、「スポーツ」の放送時間は、ロンドン大会、リオ大会での変化はほとんどなかった（図表2-8）。

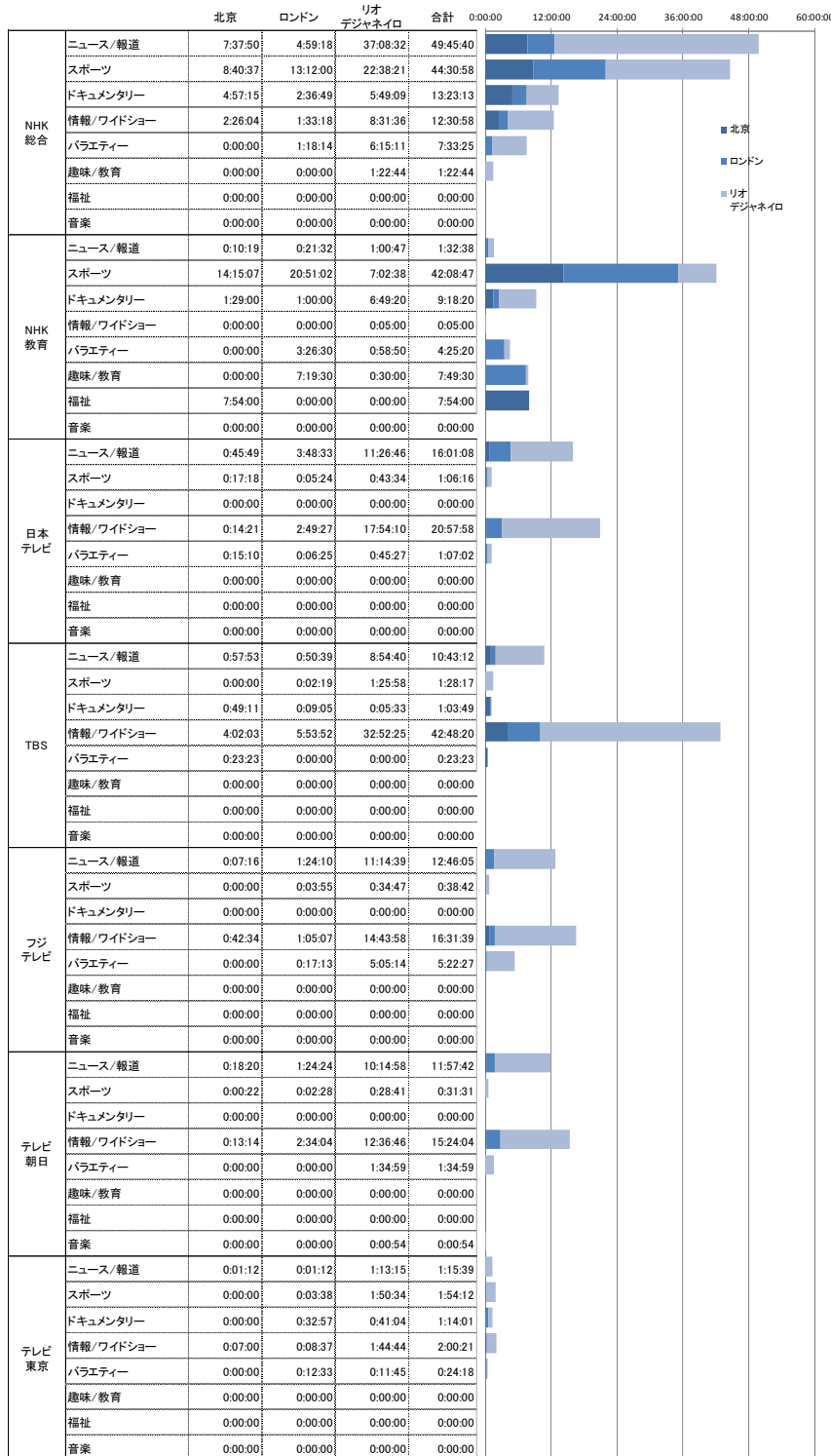
3大会の放送時間をみると、各テレビ局で番組カテゴリーはさまざまであった（図表2-9）。10時間以上の放送時間であったテレビ局の番組カテゴリーは、北京大会ではNHK教育「スポーツ」、ロンドン大会ではNHK総合とNHK教育「スポーツ」であったが、リオ大会では、NHK総合「ニュース／報道」「スポーツ」、日本テレビ「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」、TBS「情報／ワイドショー」、フジテレビ「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」、テレビ朝日「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」であった。リオ大会におけるTBS「情報／ワイドショー」が30時間を超えたのが特徴的であった。



図表2-8 番組カテゴリー別にみる大会別放送時間

注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース／報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

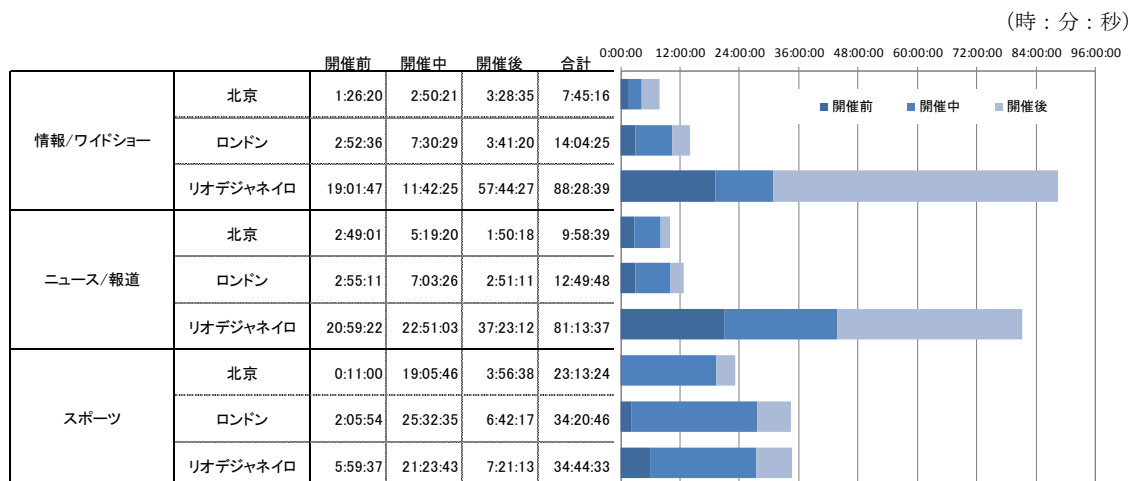
(時:分:秒)



図表 2-9 テレビ局の番組カテゴリー別にみる大会別放送時間

注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

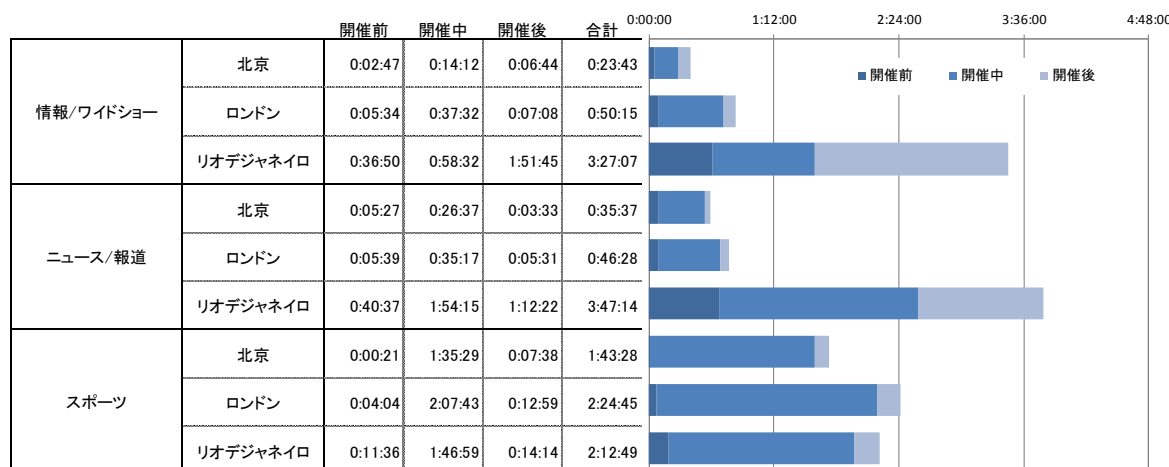
番組カテゴリー別の3大会の放送時間を「開催前」「開催中」「開催後」にわけてみると、「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」においては、リオ大会のみ、「開催後」の放送時間が急増していたが、「スポーツ」番組は、3大会ともに、「開催中」がもっとも放送時間が多く、「開催後」に減っていた（図表 2-10、2-11）。リオ大会は、「開催前」「開催後」に「ニュース／報道」「情報／ワイドショー」でも放送されることが多かった。



図表 2-10 テレビ局の番組カテゴリー別(上位3カテゴリー)にみる大会別放送時間

注) 番組カテゴリーは番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース／報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

(時：分：秒)



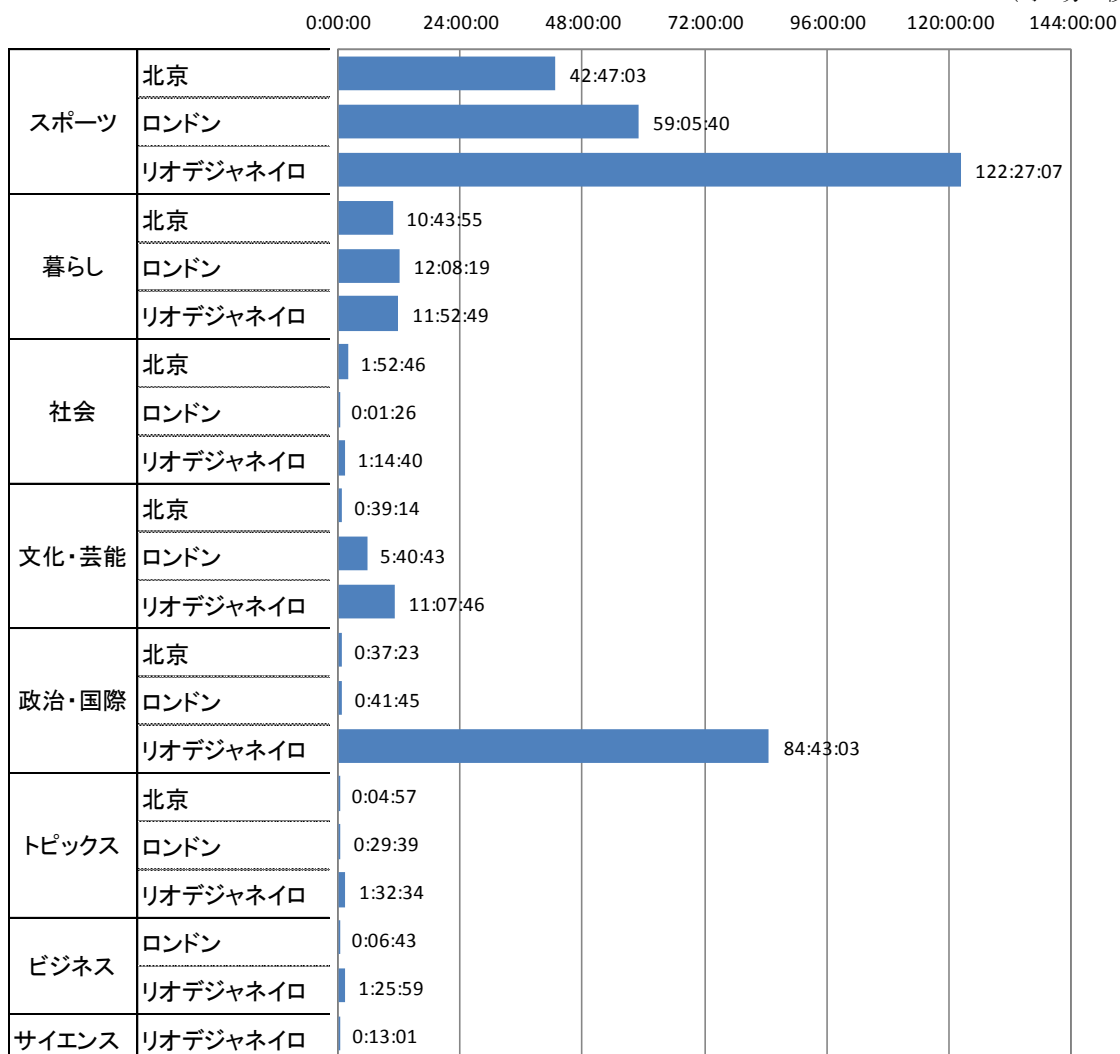
図表 2-11 テレビ局の番組カテゴリー別(上位3カテゴリー)にみる大会別一日平均放送時間

注) 番組カテゴリーは、番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース/報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

3) 番組内コーナー別にみる大会別の放送時間

番組内で取り上げられたコーナー別に3大会の放送時間をみると、過去3大会ともに「スポーツ」コーナーで取り上げられる放送時間が最も多く、その中でも、リオ大会は、北京大会(42時間47分3秒)の約3倍(122時間27分7秒)の放送時間であった(図表2-12)。また、北京大会ではほとんど取り上げられなかった「文化・芸能」コーナーにおいても、リオ大会では約11時間も取り上げられた。それに対して、「暮らし」コーナーで取り上げられる放送時間については、3大会での変化はなかった。また、北京大会、ロンドン大会でほとんど取り上げられなかった「政治・国際」コーナーにおける放送時間が、リオ大会で80時間以上に急増した。この要因は、リオ大会前に話題になったロシアのドーピング問題に関する報道であった。

(時:分:秒)



図表 2-12 番組内コーナー別にみる大会別の放送時間

注) 番組カテゴリーは、番組自体の分類を指し、番組内コーナーは番組内で取り上げたコーナーのことを指す。例えば、ニュース番組内のスポーツコーナーでパラリンピアンについての話題を取り上げた場合、番組カテゴリーは「ニュース／報道」、番組内コーナーは「スポーツ」となる。

3. リオ 2016 パラリンピック日本代表選手別の放送時間

リオ大会に出場した日本代表選手 132 人のうち、放送時間の多い上位 50 人は以下のとおりであった（図表 2-13）。

NO.	氏名	ふりがな	放送時間 合計	競技
1	山本篤	やまもと あつし	18:34:48	陸上競技
2	上地結衣	かみじ ゆい	15:34:31	車いすテニス
3	木村敬一	きむら けいいち	14:46:38	水泳
4	辻沙絵	つじ さえ	12:32:00	陸上競技
5	国枝慎吾	くにえだ しんご	11:41:45	車いすテニス
6	廣瀬隆喜	ひろせ たかゆき	9:22:53	ボッチャ
7	廣瀬順子	ひろせ じゅんこ	8:52:33	柔道
8	道下美里	みちした みさと	8:46:08	陸上競技
9	別所キミエ	べっしょ きみえ	8:11:13	卓球
10	藤澤潔	ふじさわ きよし	7:07:13	車椅子バスケットボール(男子)
11	杉村英孝	すぎむら ひでたか	6:47:29	ボッチャ
12	廣瀬悠	ひろせ はるか	6:44:59	柔道
13	香西宏昭	こうざい ひろあき	6:26:19	車椅子バスケットボール(男子)
14	藤井友里子	ふじい ゆりこ	6:21:53	ボッチャ
15	藤本怜央	ふじもと れお	6:20:41	車椅子バスケットボール(男子)
16	藤田征樹	ふじた まさき	5:43:02	自転車
17	一ノ瀬メイ	いちのせ めい	5:42:13	水泳
18	浦田理恵	うらた りえ	5:41:49	ゴールボール(女子)
19	鈴木徹	すずき とおる	5:38:47	陸上競技
20	廣瀬誠	ひろせ まこと	5:03:50	柔道
21	永田裕幸	ながた ひろゆき	4:46:05	車椅子バスケットボール(男子)
22	成田真由美	なりた まゆみ	4:40:51	水泳
23	正木健人	まさき けん	4:38:21	柔道
24	山田拓朗	やまだ たくろう	4:28:05	水泳
25	齋田悟司	さいだ さとし	4:10:11	車いすテニス
26	池透暢	いけ ゆきのぶ	4:09:36	ウィルチェアーラグビー
27	鹿沼由理恵	かぬま ゆりえ	4:07:57	自転車
28	藤井新悟	ふじい しんご	3:55:04	車椅子バスケットボール(男子)
29	津川拓也	つがわ たくや	3:53:17	水泳
30	西崎哲男	にしざき てつお	3:49:49	パワーリフティング
31	佐藤友祈	さとう ともき	3:45:23	陸上競技
32	瀬立モニカ	せりゆう もにか	3:38:18	カヌー
33	池崎大輔	いけざき だいすけ	3:37:06	ウィルチェアーラグビー
34	前川楓	まえがわ かえで	3:27:29	陸上競技
35	鳥海連志	ちょうかい れんし	3:18:39	車椅子バスケットボール(男子)
36	木谷隆行	きたに たかゆき	3:15:32	ボッチャ
37	芦田創	あしだ はじめ	3:12:57	陸上競技
38	永尾嘉章	ながお よしふみ	3:09:43	陸上競技
39	千脇貢	ちわき みつぐ	3:09:04	車椅子バスケットボール(男子)
40	池愛里	いけ あいり	3:03:29	水泳
41	藤本聰	ふじもと さとし	3:00:22	柔道
42	大西瞳	おおにし ひとみ	2:53:15	陸上競技
43	豊島英	とよしま あきら	2:46:17	車椅子バスケットボール(男子)
44	石川文則	いしかわ たけのり	2:38:51	車椅子バスケットボール(男子)
45	田中康大	たなか やすひろ	2:37:59	水泳
46	土子大輔	つちこ だいすけ	2:36:46	車椅子バスケットボール(男子)
47	鈴木孝幸	すずき たかゆき	2:35:36	水泳
48	近藤寛子	こんどう ひろこ	2:34:07	陸上競技
49	村上直広	むらかみ なおひろ	2:33:40	車椅子バスケットボール(男子)
50	宮島徹也	みやじま てつや	2:33:40	車椅子バスケットボール(男子)

図表 2-13 リオ大会での放送時間が多い選手上位 50 位

4. まとめ

東京 2020 オリンピック・パラリンピック（以下、東京大会）開催が決定した 2013 年以降、パラリンピック関連の内容を取り上げるテレビ番組が増えてきた。本調査では、北京大会、ロンドン大会、リオ大会の地上波テレビ放送時間についてみた。大会別の放送時間をみると、リオ大会は、北京大会から約 4 倍、ロンドン大会から約 3 倍の増加となり、リオ大会において急増したことがわかる。さらに、大会を「開催前」、「開催中」、「開催後」にわけてみると、「開催後」の放送時間の増加が顕著であった。リオ大会は、北京大会から約 10 倍の増加、ロンドン大会から約 7 倍の増加と、リオ大会が終了し、各テレビ局とも一斉に 2020 年の東京大会に注目を向け始めたことを示唆している。

テレビ番組のカテゴリーをみると、「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」においては、リオ大会はロンドン大会の約 6 倍の増加を示した。一方で、「スポーツ」はロンドン大会とリオ大会で、ほとんど変わらず、「スポーツ」に分類されるパラリンピック競技中継や大会ダイジェストなどの放送時間に、それほどの変化はみられなかった。ただ、テレビ番組内のコーナー別にみると、いずれの大会においても「スポーツ」が最も多く、それらの結果から、ニュース報道、ワイドショーなどの番組内スポーツコーナーにおいて、パラリンピックが取り上げられていることが推察できる。また、北京大会、ロンドン大会でほとんど取り上げられなかった「政治・国際」コーナーにおいて、リオ大会の放送時間が 80 時間をこえたこと、その放送内容の大部分がロシアのドーピング問題に関する報道によることは看過できない事実である。

テレビ局ごとにみると、3 大会の合計放送時間は「NHK 総合」が最も多く、ついで「NHK 教育」「TBS」となっている。北京大会、ロンドン大会では、民放テレビ局における放送時間は少なく、「NHK 総合」「NHK 教育」が放送時間の大部分を占めていたが、リオ大会では民放テレビ局が放送時間を総じて増やし、「NHK 総合」も放送時間を 80 時間以上に増やした。一方で、「NHK 教育」は約 16 時間と過去 2 大会よりも放送時間が減少した。テレビ局別に番組カテゴリーをみると、「NHK 総合」はリオ大会で総じて、どのカテゴリーでも放送時間を増やしたが、特に「ニュース／報道」「スポーツ」が急増した。それに対して、「NHK 教育」は「スポーツ」における放送時間が減少した。民放テレビ局においても、「日本テレビ」は「ニュース／報道」「情報／ワイドショー」の放送時間が急増、「TBS」においては「情報／ワイドショー」の放送時間がリオ大会では北京大会の約 8 倍の増加となった。ロンドン大会では、ジャパンコンソーシアムとして NHK と民放テレビ局の共同放送であったが、リオ大会、東京大会では、NHK が独占放映権を獲得している。NHK がリオ大会において、「NHK 教育」から「NHK 総合」に放送時間の割合を大きくシフトさせたのも、NHK がパラリンピックをスポーツとして放送していく姿勢の表れだと推察できる。

リオ大会に出場した選手ごとの放送時間をみると、1 位山本篤（陸上競技）、2 位上地結衣（車いすテニス）、3 位木村敬一（水泳）、4 位辻沙絵（陸上競技）、5 位国枝慎吾（車いすテニス）と、メダリストが上位 8 位までを占めた。

（小淵和也）

第3章

パラリンピアンに対する社会的認知度調査

調査概要

(1) 調査目的

リオ 2016 パラリンピック（以下、リオ大会）の開催、東京 2020 パラリンピック（以下、東京大会）の開催を控え、パラリンピアンに対する社会的認知度を測定する。前回調査（2014 年。平成 26 年度実施）との比較を行い、変化、傾向、要因などを調査する。

(2) 調査内容

主な調査内容は以下のとおりである。

- ・パラリンピアンの社会的認知度
- ・リオ大会の視聴状況
- ・日常生活におけるスポーツ環境

(3) 調査対象

全国の市町村に在住する 20 歳以上の男女

(4) 調査期間

2016 年 11 月 24 日（木）～2016 年 11 月 26 日（土）

(5) 調査方法

インターネットによるウェブ調査
当財団調べ（マクロミルモニタを利用）

(6) 回答結果

東日本エリア/男性/20 代	103	西日本エリア/男性/20 代	103
東日本エリア/男性/30 代	103	西日本エリア/男性/30 代	103
東日本エリア/男性/40 代	103	西日本エリア/男性/40 代	103
東日本エリア/男性/50 代	103	西日本エリア/男性/50 代	103
東日本エリア/男性/60 代以上	103	西日本エリア/男性/60 代以上	103
東日本エリア/女性/20 代	103	西日本エリア/女性/20 代	103
東日本エリア/女性/30 代	103	西日本エリア/女性/30 代	103
東日本エリア/女性/40 代	103	西日本エリア/女性/40 代	103
東日本エリア/女性/50 代	103	西日本エリア/女性/50 代	103
東日本エリア/女性/60 代以上	103	西日本エリア/女性/60 代以上	103

回答者数：2,060 人

(7) 調査報告並びにトピック内に示した図表の注意事項

- ・クロス集計においては、原則 x2 検定分析による有意差検定で処理して、有意水準 1%を▲▼、5%を△▽、10%を∴∴で表示するとともに、有意差が認められない場合には非表示とした。

要約

- ◆ 最も知られている選手は「国枝慎吾」(34.0%)で、ついで、「上地結衣」(14.8%)、「成田真由美」(10.5%)、「一ノ瀬メイ」(8.3%)、「辻沙絵」(6.1%)であった。
- ◆ 実施競技の正答率が高かったのは「国枝慎吾(車いすテニス)」(79.2%)で、ついで、「成田真由美(水泳)」(60.8%)、「上地結衣(車いすテニス)」(56.4%)、「道下美里(陸上競技)」(51.4%)、「別所キミエ(卓球)」(44.6%)であった。
- ◆ リオ大会の観戦形態は、「テレビのニュース番組で観た」が46.8%で最も多く、ついで、「テレビの中継番組を観た」(30.3%)、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」(13.0%)であった。いずれかの観戦形態で、観戦した競技は、「水泳」(41.1%)が最も多く、ついで「車いすテニス」(40.1%)、「陸上競技」(32.6%)であった一方、「わからない」が15.2%であった。
- ◆ リオ大会を観戦した感想は、「アスリートとして非常に優れていると感じた」(69.5%)が最も多く、ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」(65.0%)、「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」(61.7%)であった。「2020年東京パラリンピックを直接観戦したい」は35.2%であった。
- ◆ 「自分以外の身近な人に障害者がいる」と回答した人では、「テレビのニュース番組で観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した」が有意に高かった。
- ◆ 「自分以外の身近な人に障害者がいる」と回答した人では、「障害者スポーツを直接観戦したい」「障害者スポーツのボランティアをしたい」「2020年東京パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい」「アスリートとして非常に優れていると感じた」「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」「障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った」が有意に高かった。
- ◆ 日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景をみたことがあるかについて、みたことがある人の方が、パラリンピックをテレビ・インターネットで観戦した人が多く、「テレビのニュース番組で観た」以外の項目で有意差がみられた。

調查報告



1. パラリンピアン認知度

調査対象とした40名のなかで、最も知られている選手は、「国枝慎吾」であり、「知っている」「聞いたことがある」を合わせると、約3割であった(図表3-1)。ついで、「上地結衣」(知っている：6.8%、聞いたことがある：8.0%)、「成田真由美」(知っている：5.4%、聞いたことがある：5.1%)、「一ノ瀬メイ」(知っている：1.9%、聞いたことがある：6.4%)、「辻沙絵」(知っている：2.4%、聞いたことがある3.7%)だった。

前述の「知っている」「聞いたことがある」と答えた回答者を対象に実施競技についてたずねたところ、正答率は以下のとおりであった。もっとも正答率が高かったのは、「国枝慎吾(車いすテニス)」の79.2%であった。ついで、「成田真由美(水泳)」(60.8%)、「上地結衣(車いすテニス)」(56.4%)、「道下美里(陸上競技)」(51.4%)、「別所キミエ(卓球)」(44.6%)であった。

(%)

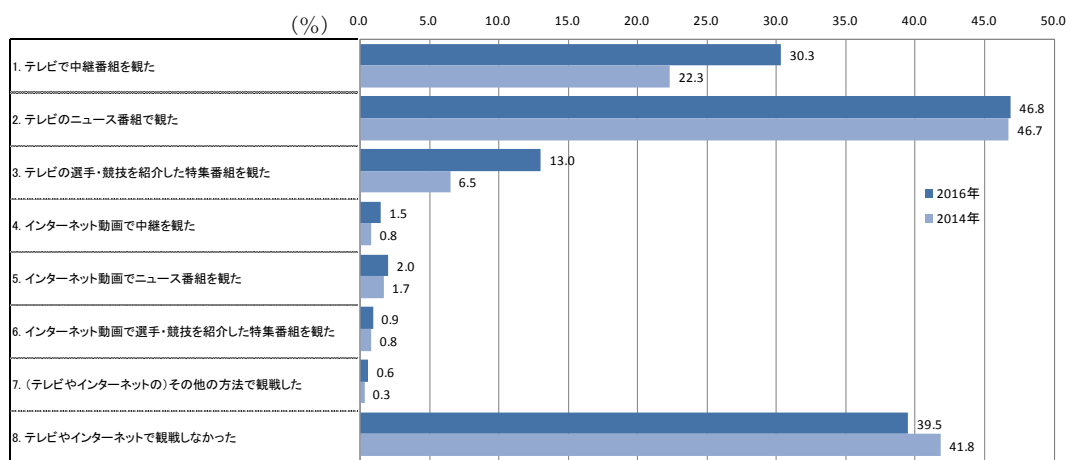
NO	氏名	全体(N)	知っている	聞いたことがある	知らない	競技名	正答率
1	国枝 慎吾(くにえだ しんご)	2,060	20.9	13.1	66.0	車いすテニス	79.2
2	上地 結衣(かみじ ゆい)	2,060	6.8	8.0	85.2	車いすテニス	56.4
3	成田 真由美(なりた まゆみ)	2,060	5.4	5.1	89.5	水泳	60.8
4	一ノ瀬 メイ(いちのせ めい)	2,060	1.9	6.4	91.7	水泳	32.4
5	辻 沙絵(つじ さえ)	2,060	2.4	3.7	93.9	陸上競技	40.8
6	山本 篤(やまもと あつし)	2,060	1.4	4.2	94.4	陸上競技	22.6
7	池崎 大輔(いけざき だいすけ)	2,060	1.2	4.0	94.8	ウィルチェアラグビー	17.8
8	別所 キミエ(べっしょ きみえ)	2,060	1.8	2.6	95.5	卓球	44.6
9	藤本 怜央(ふじもと れお)	2,060	0.8	3.4	95.8	車椅子バスケットボール	14.9
10	山田 拓朗(やまだ たくろう)	2,060	1.1	3.1	95.9	水泳	18.8
11	廣瀬 順子(ひろせ じゅんこ)	2,060	1.3	2.5	96.2	柔道	23.1
12	木村 敬一(きむら けいいち)	2,060	1.4	2.3	96.3	水泳	38.2
13	藤井 新悟(ふじい しんご)	2,060	1.0	2.7	96.3	車椅子バスケットボール	14.5
14	鈴木 徹(すずき とおる)	2,060	0.7	2.9	96.4	陸上競技	9.5
15	池 愛里(いけ あいり)	2,060	0.9	2.6	96.5	水泳	19.2
16	道下 美里(みちした みさと)	2,060	1.9	1.6	96.5	陸上競技	51.4
17	正木 健人(まさき けんと)	2,060	0.9	2.5	96.6	柔道	26.8
18	浦田 理恵(うらた りえ)	2,060	0.8	2.4	96.8	ゴールボール	18.5
19	廣瀬 誠(ひろせ まこと)	2,060	0.5	2.6	96.9	柔道	20.3
20	瀬立 モニカ(せりゅう もにか)	2,060	0.8	2.2	96.9	カヌー	7.9

図表3-1 パラリンピアン認知度と正答率(上位20位)

2. パラリンピックの観戦

1) 観戦形態

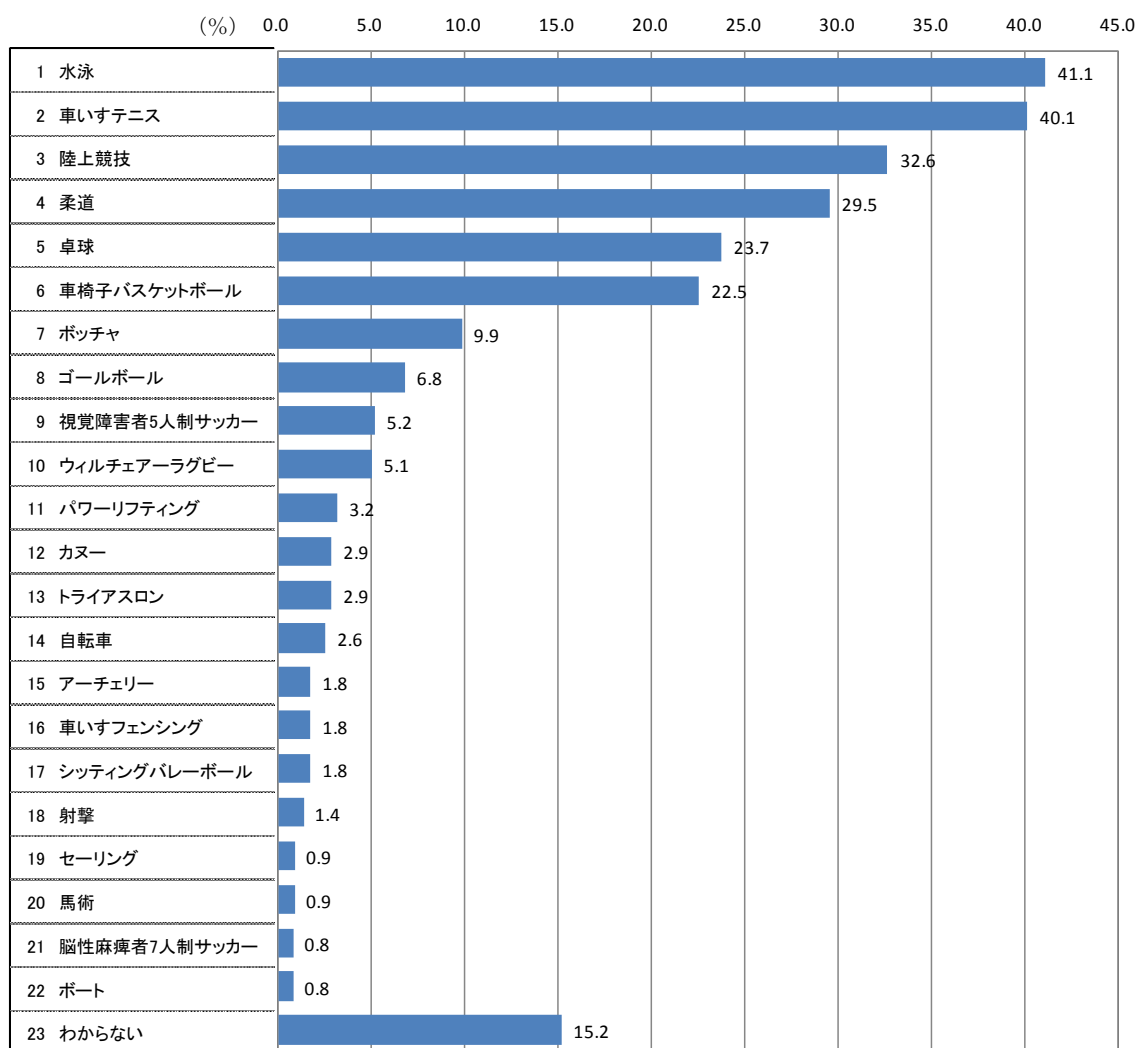
リオ大会をテレビやインターネットで観戦したかについてたずねたところ、「テレビのニュース番組で観た」が46.8%で最も多く、「観た」と答えたなかで多かったのは、「テレビで中継番組を観た」(30.3%)、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」(13.0%)であった(図表 3-2)。前回調査と比べると、「テレビで中継番組を観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」が増加したのが特徴的であった。「テレビやインターネットで観戦しなかった」は、前回調査(2014年。平成26年度実施)と同様に約4割であった。



図表 3-2 パラリンピックの観戦形態

2) 観戦種目

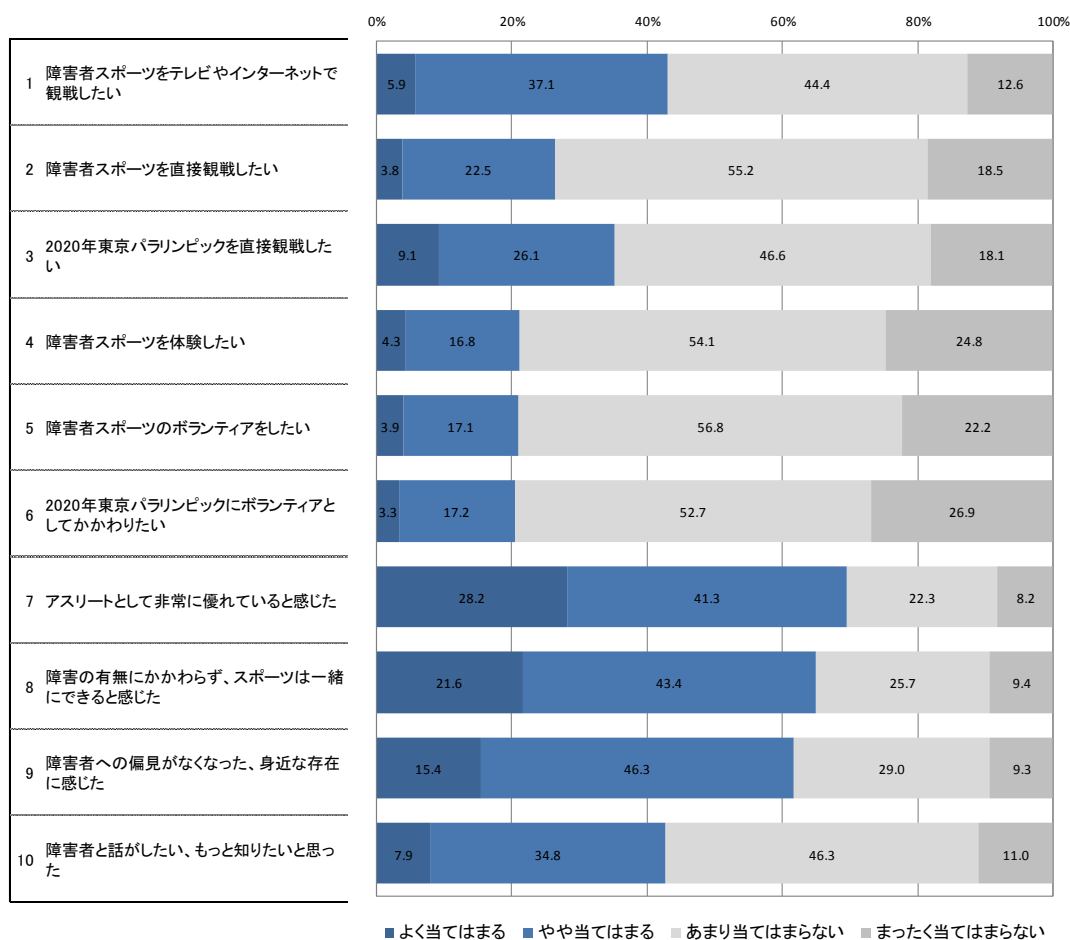
テレビやインターネットでリオ大会を観戦した人のうち、観戦競技についてたずねたところ、「水泳」が41.1%で最も多く、ついで、「車いすテニス」(40.1%)、「陸上競技」(32.6%)、「柔道」(29.5%)、「卓球」(23.7%)であった(図表3-3)。「わからない」が15.2%であった。



図表 3-3 リオ 2016 パラリンピックの観戦種目

3) 観戦後の意識変容

テレビやインターネットでリオ大会を観戦した人のうち、観戦した感想についてたずねたところ、最も多かったのが「アスリートとして非常に優れていると感じた」であった(図表 3-4)。「よく当てはまる」(28.2%)と「やや当てはまる」(41.3%)を合わせると約7割であった。ついで、「障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた」の65.0%(よく当てはまる:21.6%、やや当てはまる:43.4%)、「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」の61.7%(よく当てはまる:15.4%、やや当てはまる:46.3%)であった。「2020年東京パラリンピックを直接観戦したい」は35.2%(よく当てはまる:9.1%、やや当てはまる:26.1%)であった。

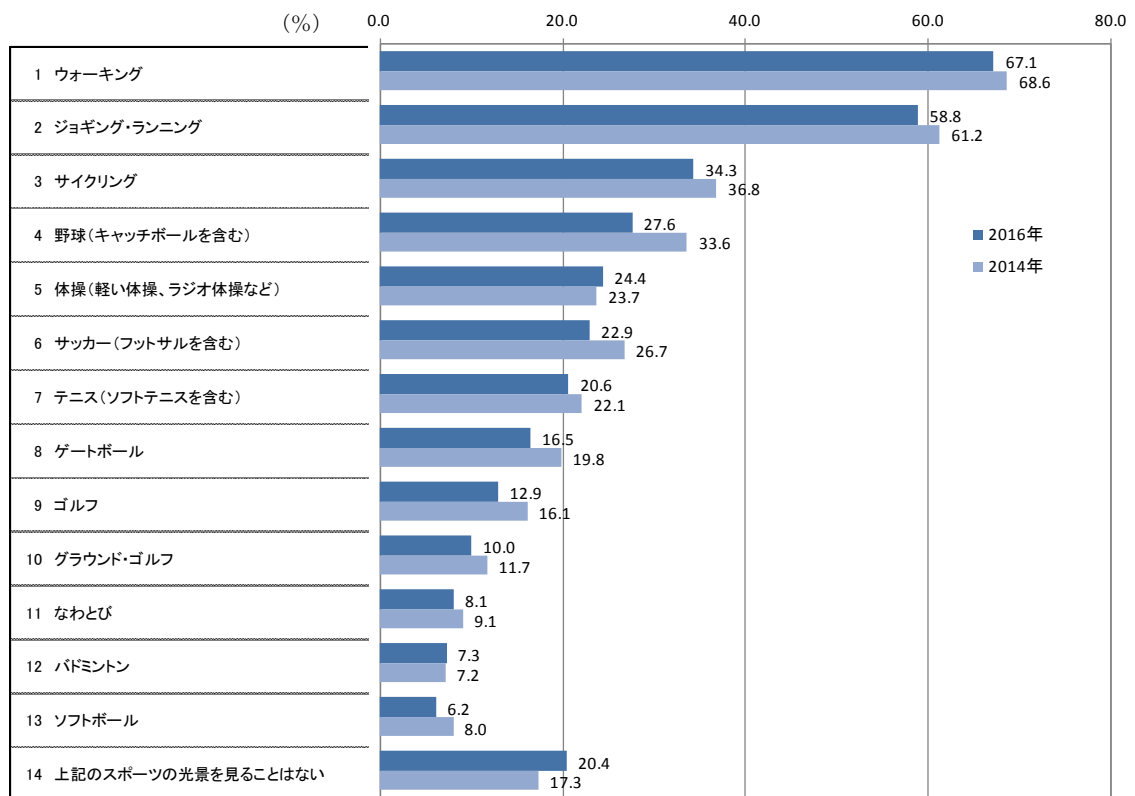


図表 3-4 リオ 2016 パラリンピック観戦後の意識変容

3. 障害者スポーツとの接点

1) スポーツを行う光景

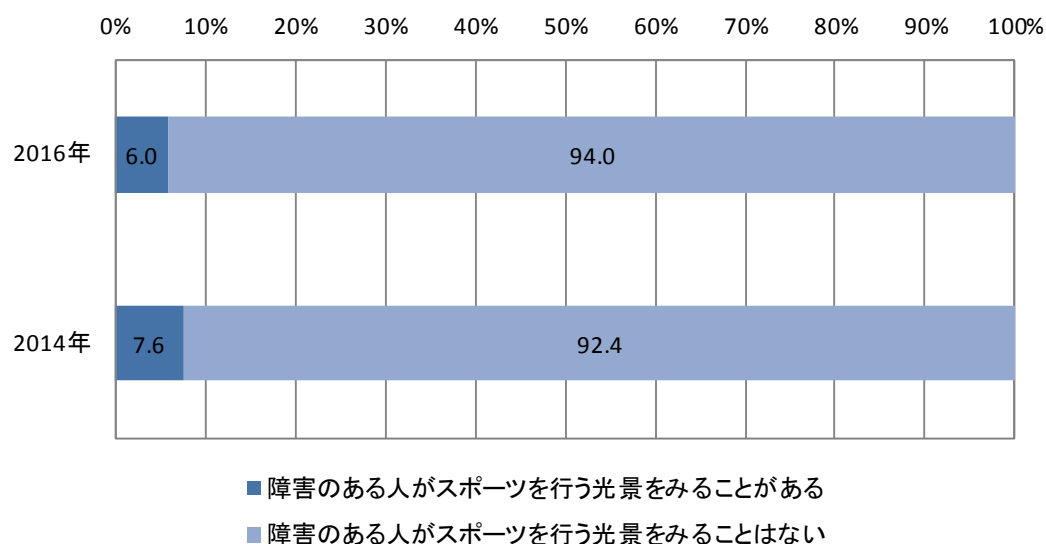
日常生活のなかで人々がスポーツを行う光景をみることがあるかについてたずねたところ、「ウォーキング」(67.1%)が最も多く、ついで、「ジョギング・ランニング」(58.8%)、「サイクリング」(34.3%)、「野球(キャッチボールを含む)」(27.6%)、「体操(軽い体操、ラジオ体操など)」(24.4%)であった(図表3-5)。



図表 3-5 日常生活の中でみるスポーツの光景

2) 障害のある人がスポーツを行う光景・種目

日常生活のなかで、障害のある人がスポーツを行う光景をみることがあるのは、6.0%であった(図表 3-6)。そのなかで、みたスポーツの種目は、「バスケットボール」が最も多く、ついで、「テニス」「ジョギング・ランニング」であった(図表 3-7)。



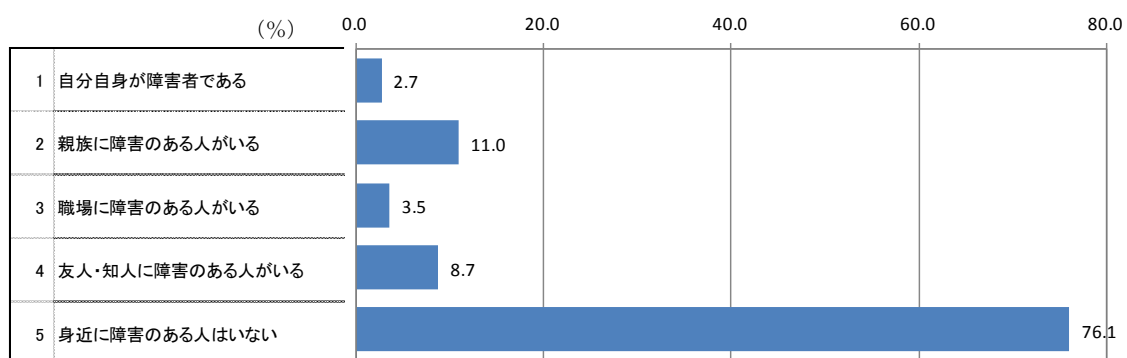
図表 3-6 障害のある人がスポーツを行う光景をみることの有無

NO	種目名	2016年(件)	2014年(件)
1	バスケットボール	28	50
2	テニス	21	22
3	ジョギング・ランニング	20	51
4	サッカー	9	16
5	陸上競技	8	-
6	水泳	8	12
7	ウォーキング	8	9
8	サイクリング	6	-
9	ゲートボール	5	6
10	卓球	5	4
11	野球	3	11
12	バレーボール	3	3
13	その他	23	25
	回答者数	152	157

図表 3-7 障害のある人がスポーツを行う光景でみる種目一覧

3) 身近にいる障害のある人

身近に障害のある人がいるかについてたずねたところ、「身近に障害のある人はいない」が76.1%で最も多く、ついで、「親族に障害のある人がいる」(11.0%)、「友人・知人に障害のある人がいる」(8.7%)であった。「自分自身が障害者である」は2.7%であった(図表3-8)。



図表 3-8 身近に障害のある人がいるか

4. クロス集計

身近に障害のある人の有無別にパラリンピック観戦形態についてみると、「自分以外の身近な人に障害者がいる」では、「テレビのニュース番組で観た」「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した」が1%水準で有意に高かった(図表3-9)。一方で、「身近に障害のある人はいない」では、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」「インターネット動画でニュース番組を観た」「インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た」「(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した」が1%水準で有意に低かった。

		全体	テレビで中継番組を観た	テレビのニュース番組で観た	テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た	インターネット動画で中継を観た	インターネット動画でニュース番組を観た	インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た	(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した	テレビやインターネットで観戦しなかった
		(%)								
全体		2,060	30.3	46.8	13.0	1.5	2.0	0.9	0.6	39.5
あなたの身近に障害のある人がいますか。	自分自身が障害者である	55	23.6	47.3	10.9	3.6	1.8	1.8	1.8	43.6
	自分以外の身近な人に障害者がいる	446	△34.8	▲52.5	▲18.2	2.5	△3.8	△2.0	▲1.8	▼32.3
	身近に障害のある人はいない	1,567	△29.3	▼45.4	▼11.7	▼1.1	▼1.5	▼0.6	▼0.3	▲41.2

図表 3-9 身近に障害のある人の有無別パラリンピック観戦形態

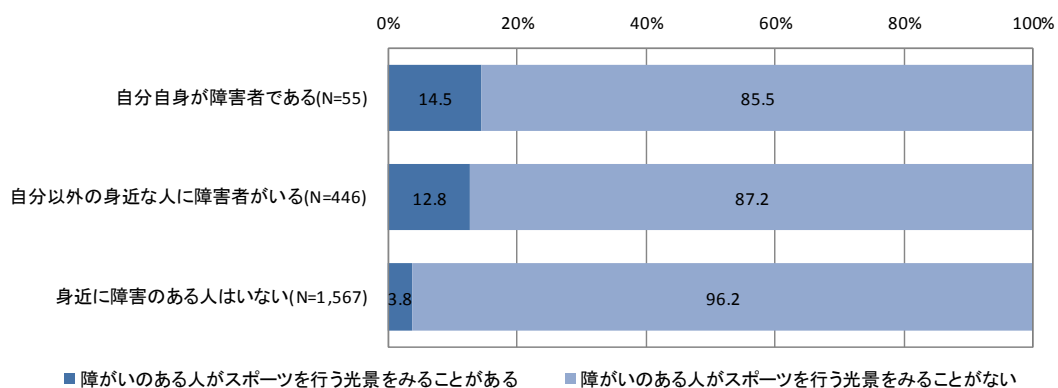
身近に障害のある人の有無別にパラリンピック観戦の感想をみた。「自分以外の身近な人に障害者がいる」では、「障害者スポーツを直接観戦したい」「障害者スポーツのボランティアをしたい」「2020年東京パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい」「アスリートとして非常に優れていると感じた」「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」「障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った」が「よく当てはまる」において1%水準で有意に高かった(図表3-10)。

一方で、「身近に障害のある人はいない」では、「障害者スポーツを直接観戦したい」「障害者スポーツのボランティアをしたい」「2020年東京パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい」「アスリートとして非常に優れていると感じた」「障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた」「障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った」が「よく当てはまる」において1%水準で有意に低かった。

		全体	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
		(%)				
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: auto;"> [全体との差の検定] 有意水準 高 低 1% ▲ ▼ 5% △ ▽ 10% ∴ ∵ </div>				
障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい	全体	1247	5.9	37.1	44.4	12.6
	自分自身が障害者である	31	9.7	35.5	45.2	9.7
	自分以外の身近な人に障害者がいる	302	∴8.3	▲44.7	∴39.4	▼7.6
	身近に障害のある人はいない	921	▽4.9	▼34.7	∴45.9	▲14.4
障害者スポーツを直接観戦したい	全体	1247	3.8	22.5	55.2	18.5
	自分自身が障害者である	31	6.5	29.0	45.2	19.4
	自分以外の身近な人に障害者がいる	302	▲7.3	▲28.1	52.3	▼12.3
	身近に障害のある人はいない	921	▼2.6	▽20.6	56.0	▲20.7
2020年東京パラリンピックを直接観戦したい	全体	1247	9.1	26.1	46.6	18.1
	自分自身が障害者である	31	9.7	25.8	51.6	12.9
	自分以外の身近な人に障害者がいる	302	△12.6	29.5	45.0	▼12.9
	身近に障害のある人はいない	921	▽7.9	25.2	46.7	▲20.2
障害者スポーツを体験したい	全体	1247	4.3	16.8	54.1	24.8
	自分自身が障害者である	31	0.0	19.4	51.6	29.0
	自分以外の身近な人に障害者がいる	302	∴6.3	▲24.2	51.7	▼17.9
	身近に障害のある人はいない	921	3.8	▼14.3	54.8	▲27.0
障害者スポーツのボランティアをしたい	全体	1247	3.9	17.1	56.8	22.2
	自分自身が障害者である	31	3.2	19.4	51.6	25.8
	自分以外の身近な人に障害者がいる	302	▲8.3	△21.5	53.3	▽16.9
	身近に障害のある人はいない	921	▼2.5	▽15.5	58.0	△24.0
2020年東京パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい	全体	1247	3.3	17.2	52.7	26.9
	自分自身が障害者である	31	3.2	16.1	48.4	32.3
	自分以外の身近な人に障害者がいる	302	▲7.3	19.2	51.7	▽21.9
	身近に障害のある人はいない	921	▼2.0	16.4	53.2	△28.4
アスリートとして非常に優れていると感じた	全体	1247	28.2	41.3	22.3	8.2
	自分自身が障害者である	31	25.8	41.9	25.8	6.5
	自分以外の身近な人に障害者がいる	302	▲37.4	42.1	▼16.6	▼4.0
	身近に障害のある人はいない	921	▼25.4	41.0	△23.9	▲9.7
障害の有無にかかわらず、スポーツと一緒にできると感じた	全体	1247	21.6	43.4	25.7	9.4
	自分自身が障害者である	31	22.6	45.2	25.8	6.5
	自分以外の身近な人に障害者がいる	302	△27.2	46.0	∴21.9	▼5.0
	身近に障害のある人はいない	921	▽20.0	42.2	26.8	▲11.0
障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた	全体	1247	15.4	46.3	29.0	9.3
	自分自身が障害者である	31	9.7	58.1	25.8	6.5
	自分以外の身近な人に障害者がいる	302	▲21.2	48.3	∴24.8	▽5.6
	身近に障害のある人はいない	921	▼13.7	45.4	30.3	△10.6
障害者と話したい、もっと知りたいと思った	全体	1247	7.9	34.8	46.3	11.0
	自分自身が障害者である	31	0.0	45.2	41.9	12.9
	自分以外の身近な人に障害者がいる	302	▲12.6	▲43.4	▼38.1	▼6.0
	身近に障害のある人はいない	921	▼6.6	▼31.8	▲48.9	▲12.7

図表 3-10 身近にいる障害のある人の有無別にみる観戦後の感想

身近に障害のある人の有無別に、障害のある人がスポーツを行う光景をみることの有無についてたずねたところ、「身近に障害のある人はいない」では、「障害のある人がスポーツを行う光景をみることもある」が3.8%と非常に低かった（図表3-11）。



**図表 3-11 身近にいる障害のある人の有無別
障害のある人がスポーツを行う光景をみることの有無**

日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景をみることの有無についてみると、すべての項目で、日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景をみたことがある人の方が、パラリンピックをテレビやインターネットで観た人が多く、「テレビのニュース番組で観た」以外の項目で有意差がみられた（図表3-12）。

	全体	テレビで中継番組を観た	テレビのニュース番組で観た	テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た	インターネット動画で中継を観た	インターネット動画でニュース番組を観た	インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た	(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した	テレビやインターネットで観戦しなかった	
		(%)								
全体	2,060	30.3	46.8	13.0	1.5	2.0	0.9	0.6	39.5	
あなたは日常生活の中で、障害のある人がスポーツを行う光景をみることがありますか。	ある	123	▲49.6	47.2	▲22.8	▲10.6	▲10.6	▲4.9	△2.4	▼25.2
	ない	1,937	▼29.1	46.8	▼12.4	▼0.9	▼1.5	▼0.7	△0.5	▲40.4

図表3-12 日常生活の中で障害のある人がスポーツを行う光景をみることの有無別にみる
リオ 2016 パラリンピック大会の観戦形態

5. まとめ

公益財団法人日本財団パラリンピック研究会「国内外 一般社会でのパラリンピックに関する認知と関心」(2014)の調査によると、パラリンピックという言葉の認知度は、98.2%（「内容を知っている」77.1%、「見たり聞いたりしたことがある程度」21.1%）と非常に高い数字を示していたが、今回の調査結果からは具体的な選手名や競技に関してはほとんど知られていない現状が示唆された。調査の回答対象とした40名のパラリンピアンのうち、最も知られている選手は「国枝慎吾」であった。「知っている」「聞いたことがある」をあわせると、約3割の認知度を示した。これは、国枝選手がこれまでに年間グランドスラムを合計5回達成するなど、世界的知名度が高いこと、調査時においても7社のテレビコマーシャルに出演していることなどが後押ししていると考えられる。2位の「上地結衣」は「知っている」「聞いたことがある」をあわせると約15%の認知度であり、理由は国枝選手と同様である。選手の実施競技についてみると、1位の国枝選手の正答率は79.2%、2位の上地選手の正答率は56.4%であった。必ずしも選手名とその選手が実施している競技が一致していない現状も明らかになった。

テレビやインターネットでのパラリンピック観戦状況を見ると、「テレビで中継番組を観た」が22.3%から30.3%、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」が6.5%から13.0%と前回調査（2014年度）から大幅に増加した。また、「テレビやインターネットで観戦しなかった」が41.8%から39.5%と僅かだが減少したことを鑑みると、前述のようにリオ大会を機に、メディアなどにおいてパラリンピックや障害者スポーツを取り上げる放送時間が増加し、それらを目にする機会が増えたことが認知度向上の一つの要因と推察できる。また、観戦種目についてたずねたところ、15.2%が「わからない」と回答した。テレビで放送されている番組がたまたま該当番組であり、“受動的”に観戦していることが推察される。

観戦後の意識変容については、約7割が「アスリートとして非常に優れていると感じ」しており、今後、障害者スポーツの観戦機会やパラアスリートと接する機会が増えていくことで、アスリートとしての能力の高さに気付く人が増える可能性が示唆された。前述の公益財団法人日本財団パラリンピック研究会の調査では、東京2020パラリンピックの観戦意向についてもたずねており、「会場で直接観戦したい」が15.4%であった。本調査で「2020年東京パラリンピックを直接観戦したい」が35.2%（よく当てはまる9.1%、やや当てはまる26.1%）であったことから、2020年に向けて、直接観戦への期待は高まっていると思われる。ただ、前回調査（2014年度）がロンドン大会終了2年後の実施、本調査（2016年度）がリオ大会終了2ヵ月後の実施とあり、回答者にパラリンピックの印象が強く残っている可能性も否定できないことから、今後、継続的に注視していく必要があるだろう。

(小淵和也)

認知度順位	氏名	競技名	出演テレビコマーシャル企業
1	国枝 慎吾	車いすテニス	アットホーム 日本生命保険 東京都 全日本空輸 独立行政法人日本スポーツ振興センターtoto 本田技研工業
2	上地 結衣	車いすテニス	東京都 JAL
4	一ノ瀬 メイ	水泳	トヨタ自動車
9	藤本 怜央	車椅子バスケットボール	サントリー
10	山田 拓朗	水泳	NTT docomo
13	藤井 新悟	車椅子バスケットボール	サントリー
14	鈴木 徹	陸上競技	東京都
16	道下 美里	陸上競技	トヨタカローラ山口
21位以下	大西 瞳	陸上競技	パナソニック
21位以下	香西 宏昭	車椅子バスケットボール	JAL
21位以下	鳥海 連志	車椅子バスケットボール	味の素
21位以下	津川 拓也	水泳	全日空
21位以下	豊島 英	車椅子バスケットボール	サントリー

(参考)主なパラリンピアンテレビコマーシャル出演

(当財団によるインターネット調べ。2016(平成28)年12月13日現在)

第4章

大学における障害者スポーツ現状インタビュー

1. インタビュー 日本体育大学

【インタビュー概要】

日時：2017(平成 29)年 2 月 10 日

場所：日本体育大学 東京・世田谷キャンパス

回答者：日本体育大学 企画部 部長 勝田真也氏

聞き手：藤田紀昭（日本福祉大学スポーツ科学部）

尾鍋文光（公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団）

【支援事業の概要】

2015(平成 27)年 12 月に、陸上競技部内に「パラアスリートブロック」を設立し、現在 2 名の選手が活動しており、2016(平成 28)年のリオ 2016 パラリンピックにおいて、本ブロック所属の辻沙絵選手（体育学部 4 年生）が女子 T47 クラスの 100m で 7 位、200m で 7 位、400m で銅メダルを獲得した。また、2016(平成 28)年 10 月に公益財団法人日本財団が「パラアスリート奨学金制度」を設立し、日本体育大学と覚書を交わし、2017（平成 29）年度から日本体育大学所属の障害者スポーツ競技者を対象に、一人当たり年間 500 万円の給与奨学金を支給することになっている。

上記の学生支援に加えて、2017(平成 29)年 4 月より北海道網走市に知的障害児を対象とした、「日本体育大学附属高等支援学校」を開設し、スポーツを行う在學生は上述の奨学生の対象になる予定となっている。

1. 現在の支援事業を始めたきっかけ

東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けて、これまでは在學生、OB・OG のオリンピック出場に主眼を置いていたが、これからは両大会を同じように考えていかなければならないということで、パラリンピック選手発掘を行おうという話になった。しかし、障がい学生向けの入試制度はなく、一般学生（健常学生）に交じって競技できる学生（聴覚障がい、肢体不自由等）しか入学していなかった。

このような状況の中で、辻沙絵さんはハンドボールのスポーツ推薦で入学したが、入学後のスポーツテストで瞬発力の高さを買われ、陸上競技部パラアスリートブロックへの転向を勧め、実績を残していく中で支援体制を加速させていった。

また、日本体育大学附属高等支援学校の開学については、先立って北海道網走市と 2014(平成 26)年に包括連携協定を結んでおり、市から特別支援学校設置の要望があったことから体育を中心とした教育課程の高等支援学校を設置することになった。

2. 支援事業の現状・大学としての位置づけ

障がい者スポーツに関わる事業を進めていくうえで、障がい学生のみ特別な支援を行うのではなく、他の学生と同様に支援をしていくことが重要であると考えている。辻が所属する陸上競技部で言えば、444 名の部員が、短距離、中距離、長距離男、長距離女、投擲、跳躍、混成、パラの 8 のブロックにわかれて活動しており、パラアスリートブロックもこれらのブロックの一つとして活動している。パラアスリートだけを部活から切り離して強化するのではなく、同じブロックとして活動を展開していくことが共生社会の実現につな

がると考えている。

2017（平成 29）年 4 月には、水泳・バドミントン・卓球・陸上に数名のアスリートが入学を予定している。

本学はスポーツに関わる事業の推進のみならず、学内の施設整備も基準に合致した施設となるよう大学の使命として計画的に改修している。

また、2017（平成 29）年度から附属高等支援学校が開学するが、在学生の支援をすべて現地の人々に任せるのではなく、体育学科で 2017（平成 29）年度より特別支援学校教諭の養成ができるよう課程認定申請を行った。

3. 障がい者アスリートのリクルート・入学後の支援について

入試制度に関しては、前述のように、一般学生と同様のシステムの中で選考をおこなっており、従来から障がいのある受験生を拒むものではなかったが、結果として実技試験をクリアできる聴覚障がい、一部の肢体不自由の学生が入学する形になっていた。しかし、近年は実技を伴わない入試を拡充しており、障がいのある受験生の支援体制が整いつつある。入試種別については、パラアスリート向けに別枠を設けておらず、高校までの競技実績が推薦基準を満たしていれば障がいの有無に関わらず出願できる形を取っている。

授業内容に関しても、これから障害程度や種別に合わせた授業の読み替えを進めている。

在学生の学費免除や奨学金、活動に関わる各種支援に関しては、部活単位で強化費をもっているわけではなく、スポーツ局という部署が一括して取りまとめており、各選手をランクづけし支援を行っている。パラアスリートに関しては、公益財団法人日本財団からの奨学金支援があり、若干異なる運用となるが、基本的にはスポーツ局での支援と同様の体制を取りたいと考えている。

卒業生の支援に関しては、決まったルールが引かれているわけではなく、まずは卒業生自身が何をしたいのか、何を目標しているのかを確認することが必要である。競技の継続だけでなく、後輩の育成のために大学院で学ぶ、社会人経験を経て再度大学に戻ってくる等、様々な道があると考えている。また、大学への進学に関しても高校からストレートに上がってくるだけではなく、社会人入試等を経て入学してくる選手等、多様なケースを想定しなければいけないので、公益財団法人日本財団の奨学金の運用に関しては、大学だけでなく、設置校の中学校・高校・支援学校等、法人全体で検討していくことが必要である。

4. 他団体（民間企業、行政、その他機関）との連携について

現在、47 か所の地方自治体と連携協定を結んでおり、各所でのオリンピック・パラリンピックに関わる講演や諸事業を行い東京 2020 オリンピック・パラリンピックの気運を高めていきたいと考えている。これらの事業の中にはパラリンピアン派遣も含まれており、各自治体との体育・スポーツ健康づくりの交流で地域を活性化することを目指している。また、NPO 法人スペシャルオリンピックス日本・東京と連携して、大会時に応援部のデモンストラクションやコース補助員、選手の補助等、様々な形で参画している。

上記の活動に加えて、本学教授が、2012（平成 24）年度から文部科学省が実施している「健全者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業」協力者会議の座長を務めており、学内で各種イベントや講座が開催され、学生が様々な場面で参加している。

また、陸上部では、2015（平成 27）年から関東身体障害者陸上競技選手権大会に約 30 名、パラ駅伝 in TOKYO 2017 に 40 名、少林寺拳法からも 30 名など、積極的に補助員学生の派遣を行っている。

5. 今後の支援事業の方向性・2020 東京パラリンピック以降の取り組みについて

東京 2020 オリンピック・パラリンピックは、各種支援事業の一つの目標ではあるが、あくまでも通過点であり、その後どのような形で事業を継続していくのかを考えているところである。

両大会の具体的な目標としては、在学生・卒業生を合わせて 70 名の選手を出場させたいと考えている。これまではオリンピックに限定した強化を行っていたが、パラリンピックもメディアで取り上げられるようになり、社会的な認知が広がってきていることから障がい者スポーツの一層の支援が必要であると思う。

また、「隔たりのない全ての人の学びの場」を形成していくことで、本学の教育理念である『健全な心身を兼ね備えた全人格的な人間の育成』のため、新しい時代のコーチングを基盤にした人材の育成を目指し、スポーツ庁、JPSA、日本パラリンピック委員会、日本財団、一般企業、地方自治体等と連携し、スポーツを通して社会を変える「スポーツイノベーション」に挑戦することで共生社会の実現、また世界平和に向けて取り組んでいきたいと考えている。



2. インタビュー 立教大学

【インタビュー概要】

日時：2017（平成 29）年 1 月 31 日

場所：学校法人立教学院 立教大学総長室企画課

回答者：立教学院企画室 室長補佐 田畑衆一郎氏

聞き手：藤田紀昭（日本福祉大学スポーツ科学部）

河西正博（びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部）

尾鍋文光（公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団）

【支援事業の概要】

2014（平成 26）年 7 月に、一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟とポール・ラッシュ・アスレティックセンター内室内温水プール（池袋キャンパス内・50mプール）の利用に関する覚書を締結し、現在は、連盟強化指定選手、育成選手が年間 140～150 日程度（週 3～4 日）使用し、合宿時には新座キャンパスプールも使用している。また、2017（平成 29）年度より同連盟と連携協定を結び、施設貸与のみならず教育研究分野での連携を進める予定となっている。

1. 現在の支援事業を始めたきっかけ

2014（平成 26）年に日本水泳連盟常任理事の安部喜方氏（立教大学水泳部総監督・立教大学卒業生）から総長に、ポール・ラッシュ・アスレティックセンタープールを日本身体障がい者水泳連盟に貸し出しできないかという打診があり、同連盟と覚書を結び施設貸与することになった。

2. 大学としての支援事業の位置づけについて

2024（平成 36）年（大学創立 150 周年）に向けて立教大学がどのようなビジョンを掲げて進んでいくかについて、2015（平成 27）年に「RIKKYO VISION 2024 (<http://rikkyo-vision.jp/>)」を制定し、その中で「東京オリンピック・パラリンピックプロジェクト」を立ち上げている。

ビジョンの中では、「Lead the Way」というキャッチフレーズのもとに「自分を拓く」「世界を拓く」「未来を拓く」という 3 つのバリューがあり、この「未来を拓く」の中のプロジェクト内に「東京オリンピック・パラリンピックプロジェクトの推進」が掲げられている。プロジェクト立ち上げ時点での議論では、何をしていけばよいのか不明確な部分もあったが、立教大学の強みを生かして何ができるだろうかということ考えた。大学の強みの 1 つに「しょうがい学生支援」があり、全学的にしょうがい学生を支援している。このような中で、2014（平成 26）年に日本身体障がい者水泳連盟から施設貸与の依頼があり、当時は「パラリンピック」という言葉自体が大学の中では必ずしも浸透していたわけではなく、学内では、学費を使って作った施設をなぜ学外の団体に貸与しなければいけないのかという意見があったが、大学の価値向上等の議論は抜きにして、障がい者支援の一環として検

討しなければならないという議論があり、連盟と覚書を交わし、上記のプロジェクトの一環として位置づけて活動を進めている。

3. 支援事業の基本方針

「東京オリンピック・パラリンピックプロジェクト」の立ち上げに当たり、「未来」「共生」「感動」という3つのキーワードを設定している。

【未来】

小学校から大学までの一貫連携教育で、オリンピック・パラリンピックの精神を学習する。また、将来のオリンピック・パラリンピックを担う人材を育成する。

- ・オリンピック・パラリンピック教育の展開
- ・各種研究活動

【共生】

障がい者スポーツ、障がい者支援の在り方を問い直す契機とする。

- ・障がい者スポーツ支援
- ・障がい者支援

【感動】

オリンピック・パラリンピックをより身近なものと感じられるよう、ワクワク・ドキドキの場を創出する。

- ・選手との交流
- ・ボランティア育成／大会支援

4. 支援事業の現状と課題

選手のプール利用に関しては、立教池袋中学校・高校、立教大学の正課と正課外活動および部活動に影響のない範囲での貸与が原則となっている。選手たちが利用するので正課や部活動の調整をするまでのことはないが、急遽空いた時間の利用等、日々細かい調整は行っている。また、教職員と学生の健康増進のために、平日の夕方から夜にかけてプールを開放しており、現在は全6コースのうち、2コースを日本身体障がい者水泳連盟選手が利用し、4コースを一般利用者用としている。

連盟からの要望として、障がい者水泳の指導者不足から、指導者養成への協力が求められており、講習や研修時に教室を利用してもらうように考えている。施設貸与のみならず、水泳部学生や関係教職員のボランティア、指導者としての参加についてはこれから議論になると考えられるが、一言で身体障がいといっても、視覚障がいなのか、肢体不自由なのか等、障がいごとのノウハウがあり、特別なボランティア、指導者養成が必要であると考えている。現在のところ、学内ではこれらの養成をしようという声は出ていないが、学内外に専門的な知見をもった人がいるとすれば、ぜひ共同していきたいと考えている。

5. 障害者アスリート（在学）の支援について

若杉遥さん（社会学部3年生）が女子ゴールボール日本代表としてリオ2016パラリンピックに出場したが、金銭的な支援や学内でのトレーニング支援等は積極的には行っていない。学生がパラリンピックに出場するのは初めてのケースであり、大学としてノウハウがなく、どのような対応をするのが良いのか非常に悩む部分があり、リオ2016パラリンピック出場の横断幕を学内に掲げ、壮行会を開くことになった。一人の学生として平等に扱うということと、日本代表としてパラリンピックに出場という特殊な立場があり、大学としてどのような支援を行うべきかは非常に難しいところであるが、「この学生は特別なのだ」というアピールはせず、学外でスポーツ活動を行っている一学生であるという認識をもっている。日常的なサポートについては、しょうがい学生支援室が担当しており、他の障がい学生と同様に授業や試験時のサポートを行っている。

今回のリオ2016パラリンピック出場に関する対応については、正直なところ議論する時間が十分ではなかったというところであり、一般学生に彼女の活躍を伝えることができなかったことが残念であった。

6. 障害者アスリートのリクルート・入学後の支援について

障がいのある受験生の対応については、しょうがい学生支援室で入学相談を受け付けている。仮に障がい者スポーツを行う学生が入学してきたとしても、他の学生と同様にしょうがい学生支援室を中心とした支援に留まるものと考えている。大学自体が体育会学生を特別扱いしておらず、資源を優先的に配分することはしておらず、今後、障がい者アスリートが入学した場合に、どのような支援をしていくのかという議論をすることになると思うが、まだ、特別な支援をしていこうという議論をする時期ではないと考えている。

入学した学生がオリンピックやパラリンピックに出場すれば、現行の制度内での支援はするが、金銭的な支援や授業・試験の免除等、それらの議論はされていない。それが立教大学の特色と言えるのかもしれない。

7. 他団体（民間企業、行政、その他機関）との連携について

2017（平成29）年4月に東京都豊島区と連携協定を結び、障がい者スポーツ支援を行っていく予定である。豊島区とは2007（平成19）年に「連携・協働に関する包括協定」を結んでおり、また、豊島区が障がい者のスポーツ実施率を30%に上げるという目標を掲げており、プールや大学内のウォーキング等の活動を進めていきたいと考えている。具体的な連携内容については豊島区のニーズを把握したうえで検討していきたい。また、文部科学省「パラリンピック競技ナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点施設（水泳）」に、ポール・ラッシュ・アスレティックセンターが指定され、障がい者水泳の強化拠点としてより一層、障がい者スポーツ支援に力を入れていく予定である。

水泳以外の連携については、2017（平成29）年4月にプロ野球チーム埼玉西武ライオンズと連携協定を結ぶ予定である。具体的な協力内容としては、大学施設を使っの車椅子ソフトボールの普及事業、大学の教育・研究に関わる分野での相互協力を予定している。

8. 今後の支援事業の方向性・東京 2020 パラリンピック以降の取り組みについて

大学としては、これまで培ってきた障がい学生支援のノウハウと、ここ数年関係性を築いてきた障がい者スポーツ関連団体との連携を見据えて、東京 2020 オリンピック・パラリンピックでは、障がい者アスリート、もしくは障がい者スポーツ競技団体に対する支援を軸に活動していこうと考えている。

これらを実現するにあたって重要な要素がボランティア活動の歴史と経験である。立教大学はキリスト教系の学校で、キリスト教の精神に基づいた建学の精神を持っている。ボランティア活動は、1964（昭和 39）年の東京オリンピックの時から率先してやっており、その時からのノウハウが蓄積されている。それをこれからは障がい学生、障がい者に対するボランティア活動に結び付けていきたいと考えている。障がい者向けのボランティア活動は、様々な知識や技術が必要であり、そういったことも学生に対する教育の一環として行っていきたいと考えており、東京 2020 オリンピック・パラリンピックの開催を契機に大学のボランティア教育や障がい学生支援がもう一段階ステップアップすると考えている。

また、2017（平成 29）年に再締結する日本身体障がい者水泳連盟との連携協定については、選手の施設利用をより円滑化するだけでなく、立教中学校・高校・大学の教育研究に対する効果をより高めていきたいと考えている。たとえば、中学校で必修になっている卒業論文執筆の際に選手のインタビューをすることや、中学生・高校生の練習見学等、大学生であれば、ボランティア活動の一環として関わる中で、「共生の意味」を考えてもらいたいと考えている。この点については、ボランティアセンターと連携して具体的なプログラムを検討中である。

これらの活動で重要なのは、正課・正課外活動と連携していく中で学生に対する教育効果をどのように高めていけるのかということであり、これが本事業に対する大学のミッションである。今回の連携は、大学としてどのような障がい学生支援、障がい者支援、障がい者スポーツ支援が必要なのかを考えるうえで、非常に良い機会になっている。

大学として、東京 2020 パラリンピックは通過点と考えており、2020 年を経て大学が発展し、社会にインパクトを与え、教育研究が発展していることを理想としている。



3. まとめ

本項では、大学における障害者スポーツ支援の先進事例を検討することを目的に、日本体育大学および立教大学へのインタビュー調査を行い、両大学の事例の一端を記述した。

日本体育大学では、2020（平成32）年の東京2020パラリンピックを見据えて、陸上競技部内に「パラアスリートブロック」を設立し、所属学生である辻沙絵選手が2016（平成28）年のリオ2016パラリンピック女子400mで銅メダルを獲得した。また、2017（平成29）年度からは公益財団法人日本財団の支援を得て障害者スポーツに特化した奨学金制度を設ける予定となっている。

また、立教大学は、一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟と連携し、大学内のプールを2014（平成26）年から連盟強化指定選手が使用しており、また、2017（平成29）年2月に文部科学省「パラリンピック競技ナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点施設（水泳）」に指定され、障害者水泳の強化拠点としてより一層、障害者スポーツ支援に力を入れていく予定である。両大学における障害者スポーツ支援について、特徴的なのは双方の支援方策の違いである。具体的には「直接的支援」を行う日本体育大学、「間接的支援」を行う立教大学とまとめることができるのではないだろうか。

日本体育大学では前述の辻選手の例にみられるように、在学するアスリートの競技力向上のための指導者招聘やパラアスリートブロックの設立、さらには公益財団法人日本財団による奨学金支援により、在学生および卒業生のパラリンピック出場を大きな目標として掲げており、今後は陸上のみならず他競技にも支援が拡大していくのではないだろうか。また、2017（平成29）年度から北海道網走市に開校する附属高等支援学校は、スポーツを教育の軸としており、アスリート養成に特化しているわけではないが、知的障害児のスポーツ支援を積極的に行っていく予定となっている。

一方の立教大学では一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟との連携をさらに深め、2017（平成29）年度には連盟と連携協定を再締結し、施設貸与のみならず教育研究分野での各種協同が予定されている。また、前述のように障害者水泳の強化拠点施設となったことで、全学的な競技環境支援はより充実したものになると考えられる。また、在学生が、女子ゴールボール日本代表としてリオ2016パラリンピックに出場したが、金銭的な支援等、特別な配慮は行わず「学外でスポーツ活動を行っている一学生である」という言葉に象徴されるように、「間接的な障害者スポーツ支援」を主眼に置いているのではないだろうか。

以上のように両大学の支援には方向性の違いがみられる一方で共通点もみられる。それは、大学の将来ビジョンの中に障害者スポーツに関わる諸事業を明確に位置づけ、大学として支援していこうとしている点である。日本体育大学では、部活動を中心とした競技的な支援だけでなく、入試や奨学金等の支援や、全学を挙げての支援を行っており、これらを大学の「使命」と述べている。また、附属高等支援学校の開学にみられるとおり、障害者スポーツ支援が大学のみならず法人としての事業計画の一環であるとされている。

また、立教大学では、障害者スポーツ支援を「東京オリンピック・パラリンピックプロジェクト」の重点施策と位置づけており、スポーツ施設の貸与のみならず、小学校から大

学までの一貫教育におけるオリンピック・パラリンピック教育の充実、障害者スポーツボランティアの育成や各種大会支援等、具体的なビジョンを掲げている。

従来、大学における障害者スポーツ支援は、関連分野の教員や一部の部署や学部学科等による限定的なものが多くみられ、両大学のように障害者スポーツ支援を全学的な事業と位置づけ推進する事例が出てきたことは大きな変化と言えるのではないだろうか。

また、共通点の2つ目として挙げられるのは各種障害者スポーツ支援を別枠で設けるのではなく、正課・正課外活動との調整を図りながら既存の枠組みの中に統合していこうとする方向性である。換言すれば、両大学とも「インクルーシブな障害者スポーツ支援」を志向していると言えよう。

日本体育大学の例では、パラアスリートブロックは陸上競技部内に設立され、辻選手は他の陸上部員と同様に活動し競技力向上に励んでいる。また、入試や奨学金等の支援についても、パラアスリート向けの制度は設けておらず、障害の有無に関わらず一競技者として迎え入れていることが明らかになった。インタビュー中には、支援事業について「2020年からの道というのは～（中略）本当に皆が一緒に生活できる。そしてそれが楽しく、それが普通じゃないの？というふうにもっていければ一番いい」と述べられており、ともに競技していく中で相互理解を深めていくことが重要であると指摘されている。

立教大学においては、競技団体への施設貸与を単なる競技力向上に留めてしまうのではなく、附属中学校・高校・大学の教育研究に波及させることが目的の一つとなっている。中学生・高校生の練習見学等、大学生であれば、ボランティア活動の一環として選手たちと関わる中で、「共生の意味」を考えてもらいたいといった指摘がされており、パラアスリートと在学生在が関わることで、障害学生支援や障害者支援を考える際の端緒にしていきたいという大学の意図を読み取ることができる。

以上のような両大学の志向性は、障害者スポーツ環境の構築に寄与するだけでなく、大学という高等教育機関におけるインクルーシブ教育を検討していくうえでの好例と言えるのではないだろうか。

最後に共通点として挙げられるのはともに地域連携を重視している点である。日本体育大学は、現在47か所の地方自治体と連携協定を結んでおり、オリンピックに関わる講演や諸事業を行い、これらの事業の中には辻さん等のパラリンピアン派遣も含まれている。一方の立教大学では、2017（平成29）年4月に東京都豊島区と連携協定を結び、障害者スポーツ支援を行っていく予定となっており、プールや大学内のウォーキング等の活動を進めていくとしている。

全国的に障害者専用、優先利用のスポーツ施設が利用過密化し、近年、総合型地域スポーツクラブを障害者のスポーツ振興の拠点とすべく、文部科学省や地方自治体が各種事業を行っているが、大学もその一翼を担う存在となっていくのではないだろうか。各大学には一定数の学生が在籍しており、潜在的なボランティア、支援者人口を抱えていると言えよう。また、体育・スポーツ、医療、保健、福祉、教育等、障害者スポーツに隣接する領域の大学であれば、専門的な知見をもった教員がおり、直接的な競技指導や、諸活動に対するマネジャー、コーディネーターとしての役割を担うことができるのではないだろうか。さらに、本調査の対象校のように体育・スポーツ系の学部、学科を有する大学には各種体

育施設が設置されており、上述のようなマンパワーの提供、教員の関与ができないとしても立教大学のような施設貸与を通じての支援も可能である。

2016（平成 28）年 12 月現在、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と連携協定を結んでいる大学は 792 校にのぼり、その関心の高さがうかがわれる。大学と一言で言っても千差万別であり、画一的な障害者スポーツ支援を行うことはできないが、地域の障害者スポーツに対するニーズを適切に把握し、それぞれの大学の強みを生かした支援を行っていくことで、大学が今後の障害者スポーツ振興における大きな原動力になっていくのではないだろうか。

当財団の調査研究において、2012（平成 24）年度、2014（平成 26）年度に、大学における障害者スポーツの現状に関する調査を行っており、今年度はこれらの量的調査を踏まえて大学における先進事例の検討を行ったものである。今後も同様の調査研究を継続し、大学における障害者スポーツ支援に資する基礎資料を蓄積していきたいと考えている。

（河西正博）

第5章

シンポジウム 2016「障害者スポーツ選手発掘・育成システムのモデル構築に向けて」

シンポジウム2016「障害者スポーツ選手発掘・育成システムのモデル構築に向けて」を開催

【開催概要】

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団（以下、当財団）は、公開シンポジウム2016「障害者スポーツ選手発掘・育成システムのモデル構築に向けて」を、2016（平成28）年11月5日（土）に、御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンター（東京都）にて開催した。

【後援団体】

スポーツ庁、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会、公益財団法人日本体育協会、公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人笹川スポーツ財団、公益社団法人東京都障害者スポーツ協会（順不同）

【開催の目的】

当財団は2012（平成24）年度から「障害者スポーツを取り巻く環境調査」に関する調査研究活動に取り組んでおり、その一環として実施した。2015（平成27）年度は「2015ジャパンパラ（水泳・陸上）競技大会」の出場選手に対する障害者スポーツ選手キャリア形成や競技練習活動環境に関する調査を実施し、その結果を踏まえ、課題解決や環境改善の一助となることを目的に開催した。なお、障害者スポーツの選手強化に関するシンポジウム開催は、2014（平成26）年12月に兵庫と東京の2会場で「日本のパラリンピック選手強化の現状と課題」を、そして2015（平成27）年7月に東京の「パラリンピック選手発掘・育成・強化システムの現状と今後の方向性について」に続いて今回で4回目となる。

【当日の様相】

スポーツ関係団体・組織、大学関係者や報道機関など各方面からおおよそ100人（行政関係：約13%、教育関係：約32%、競技団体：約18%、報道機関：約19%、企業関係：約14%、その他：約4%）が参加した。シンポジウム冒頭に当財団理事である浅見俊雄氏の挨拶に続き、当財団障害者スポーツ・プロジェクトを代表して藤田紀昭プロジェクトリーダーが平成27年度調査研究の結果を報告した。

また、シンポジストとして水泳の一ノ瀬メイ選手と陸上の辻沙絵選手がそれぞれアスリートの立場から、日本ボッチャ協会強化指導部長であり日本代表ヘッドコーチの村上光輝氏が指導者の立場から、日本パラ陸上競技連盟理事長の三井利仁氏が競技団体の立場から、それぞれの現状や抱えている課題の報告を行った。続くパネルディスカッションでは本プロジェクト委員の齊藤まゆみ氏がコーディネーターを務め、来場者も交えて幅広い議論と活発な意見交換が行われた。

なお、シンポジウム閉会后には、パネリストの皆さんを囲んで懇談会を実施。なごやかな雰囲気の中で競技種目や立場を超えての交流が図られた。

【発表要旨】

＜調査結果の報告＞

藤田 紀昭氏（日本福祉大学スポーツ科学部／当財団 障害者スポーツ・プロジェクトリーダー）

平成24年度から障害者スポーツ選手を取り巻く環境について継続的に調査・研究を重ねてきた。その中で平成27年度は、障害のある選手の競技生活実態を明らかにすると同時に、どのようにしてスポーツを実施するようになったか（スポーツへの社会化）を明らかにするため、陸上競技と水泳の2015ジャパンパラ競技大会出場者218人を対象に調査を実施した。今回の調査によって、たとえば先天的障害者は学校関係者や家族の影響を受けてスポーツを始めることが多く、後天的障害者はコメディカル※1やスポーツ関係者の影響を受けていることなどがわかった。こうした現状を踏まえると、選手発掘のためには学校関係者や理学療法士などが障害者スポーツの情報を知っていることが重要であると考えられる。そのような環境を作るためには、体育教員を志す者に障害者スポーツの関連授業を必修科目としたり、理学療法士会や作業療法士会と、各地の障害者スポーツ協会の連携をなお一層深めていくことが必要と考えられる。今回の調査結果をもとに、我々もこうした提言を行っていきたい。



※1：コメディカルとは、医師・看護師以外の医療従事者を指す言葉。

<パネルディスカッション>

Q どのような時期に「アスリートとしての自覚」が生まれたのか、その転機となった人や事柄についてお聞かせください。

一ノ瀬 メイ氏（水泳競技選手／近畿大学水上競技部／リオ2016パラリンピック日本代表）

競泳選手にとって、小さい頃に専門的な環境に身を置いて、どれだけ泳ぎ込むことができるかというのは非常に大切な要素。私は小学生の頃、クラスで一番速く泳ぐ力があっても、障害を理由に地域のスイミングクラブに入会することができなかった。このように障害者がアスリートになるためには、さまざまなハードルがある。これによって、健常の選手とくらべるとアスリートコースに入るのに5年遅れてしまったという残念な気持ち



がある。現在は近畿大学に40人いる部員の一人として練習しているが、障害者スポーツに関する専門的な知識を持ったコーチにマンツーマンでみてもらえるという環境ではない。コーチにまずは障害者スポーツを知ってもらい、パラリンピックにも来ていただいて、少しずつ理解を深めてもらっている段階。健常の部員と一緒にトレーニングや指導は、私に当てはまることもあれば、そうでないこともある。でも、チームに所属して、チームに誇りを持ち、応援して、応援されるというのは素晴らしいことで、私の心の支えの一つにもなっている。

辻 沙絵氏（陸上競技選手／日本体育大学陸上競技部パラアスリートブロック／リオ2016パラリンピック日本代表）

私は、小学校5年生からずっと健常者とともにハンドボールをしてきた。大学に入って測定を受け、瞬発力の高さから陸上への転向を勧められた時も、なぜハンドボールから離れなければならないのかという思いのほうが強かった。気持ちが切り替わったのは、6位に入った世界選手権で、走幅跳びの山本篤選手が金メダルを獲得した光景を見たことだった。国歌が流れ、国旗が掲揚される中で山本選手の晴れがまし



い表情を見て、私もあの場所からの風景を見てみたいと覚悟を決めた。私の場合、現在、最高の練習環境や指導者に囲まれているという感謝の気持ちを持っている。来春、大学を卒業するが、トレーニングはこれまでどおり日体大で、また引き続き現在の監督の指導を受けたいと考えている。4年後に向けては、まだまだ少ない女性のコーチやスタッフを増やしていただけるようお願いしたい。

Q 世界で戦える「アスリート」に育てるためには？

村上 光輝氏（一般社団法人日本ボッチャ協会 強化指導部長／リオ2016パラリンピック ボッチャ競技ヘッドコーチ）

リオ2016パラリンピックで銀メダルを獲得し、こうして皆さんの前でお話しさせていただくことが増えた。しかし、本日のテーマである「発掘・育成・強化」という視点では、必ずしも成功はしていない。もちろん我々も、日本選手権出場者を対象とした育成活動や、一般公募による代表選考合宿などさまざまな取り組みを行ってきた。しかし、そうした育成対象選手がパラリンピック代表を逃し、個人で強化を図



ってきた選手が出場権をつかむケースも現実にはあった。他国では新戦力がいきなりメダルを獲得している一方で、日本は若手選手の強化に失敗したと言わざるを得ない。ボッチャの場合、陸上やサッカーのように一般の競技で培われたロールモデルが存在しないことも難しさの一因。ボッチャは障害者スポーツとして捉えられているが、じつは誰でも楽しめるスポーツとしての普及や、一般の方が参加できる大会の開催がパラ代表の強化にもつながるのではないかと考えている。

三井 利仁氏（一般社団法人日本パラ陸上競技連盟 理事長／国際パラリンピック委員会 陸上競技国際技術委員）

ロンドン大会、リオ大会と、日本パラ陸上界は2大会連続で金メダルを獲得できていない。その一方で、入賞者は毎回増えているし、若い育成選手も増えている。そうした中で世界の情勢をみると、強豪国と呼ばれる国のほかに、我々のリサーチが及ばない国がメダルを獲得した。私はバルセロナ大会から指導を行っているが、選手・スタッフ自身が生活のすべてを競技のために向けていく覚悟を持たなくては結果に結びつけるのは難しいと考えている。重要なのは、選手にそう思わせる指導者と出会うことができるかということ。現在、公的な資金を投入して、一貫した教育プログラムによって指導者を育て、指導者資格を発行していくような取り組みを進めている。同時に発掘という視点では、体験したい、試合に出たい、専門的な指導を受けたいという人に対して、多くの人が情報をキャッチできるシステムを急ぎ構築することも重要だろう。



コーディネーター 齊藤 まゆみ氏（筑波大学体育系准教授／当財団障害者スポーツ・プロジェクト委員）

本日の活発なディスカッションによって、いくつかの大切なポイントがみえてきた。たとえば、障害者スポーツ選手のパスウェイには、それぞれの段階で必要とされる「環境・重要な他者」がある。これからスポーツをしたいという人に、その機会と環境が存在することへの気づき（awareness）のための取り組み、また、スポーツに親しむ段階やアスリートとして競技に向き合う段階など、成長に応じて適切な指導者が必要なこともわかった。一方で、そうしてスポーツに親しむようになってから、アスリートとして育つまでには長い時間がかかる。そこには学校現場での理解、科学的な知見、専門知識を持った指導者、地域とのつながりやNF(国内競技連盟)との関わりなども欠かせない。こうしたことを念頭に置いて、日本社会に合ったパスウェイを今後も力を合わせて探っていかななくてはならない。その時には、単に競技者としての成功や輝きだけでなく、デュアルキャリア・セカンドキャリアを含む競技者の人生を見据えて判断をしていく視点を忘れてはならないとあらためて感じた。



（齊藤まゆみ）

あとがき

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団
調査研究 障害者スポーツ・プロジェクトリーダー
藤田紀昭

リオ 2016 パラリンピック。資金不足と準備の遅れから開催すら危ぶまれた大会であったが、ふたを開けてみれば、大きな混乱もなく無事終了したように思われる。私にとってはアトランタ 1996 大会から数えて 6 回目のパラリンピック観戦となった。国内でチケットを販売するのは特定の代理店に限られている。その代理店に割り当てられた観戦チケットの範囲内では、自分の旅程に合わせて、みたい競技のチケットを購入するのは至難の業だった。結局、出発前までに購入できたチケットは 3 枚だけ、40 時間近くかけてリオに行き、5 日間の滞在で 3 競技だけの観戦ではかなりもったいない気がしていた。

アトランタ 1996 大会の時は 1 日券が 1000 円程度、入場の際にチケットのチェックをされることもなくほとんどフリーで入れたことを思うとまさに隔世の感がある。幸い現地入りしてからすぐにインターネットでさまざまな競技のチケットを入手することができ、見たかった競技のほとんどを見ることができた。その後、滞在 3 日目くらいに再度チケット販売のサイトをのぞいてみるとほとんどの競技のチケットが売り切れになっており、驚かされた。リオ 2016 パラリンピックは開会してから急激に盛り上がり、競技会場に多くの人が足を運んだものと思われる。

会場が人でいっぱいになったという点では大会は成功したといえるかもしれない。問題はレガシーが残ったか？という点である。懸念するのは急激に熱したものは、急激に冷めるのではないかとということである。英国ウースター大学の Mick Donovan 氏は「レガシーは大会前にも、大会中にもそして大会後にもある」と述べている。大会前に多くの人々が障害者スポーツに関心を持ち、それを大会の盛り上がりにつなげる。その意識の変化を大会後も継続させる。このことこそが重要なのであり、パラリンピックが目指すところ、また我が国が向かおうとしている共生社会の実現に結び付くのではないだろうか。

今年度の調査で、北京 2008 パラリンピック、ロンドン 2012 パラリンピックと比べてリオ 2016 パラリンピックはテレビ放送時間が格段に多くなっていることがわかった。しかし、2 年前の本プロジェクトの調査とくらべて障害者スポーツ選手の認知度はさほど変化していないことが明らかになった。テレビ放送が増えたのに認知度は上がっていない。少々乱暴な言い方になるかもしれないが、人々の関心がまだ障害者スポーツやパラリンピックに向いていないということなのかもしれない。しかし、変化の兆しはみられる。今年度インタビューさせていただいた 2 大学では大学のビジョンの中に障害者スポーツ関連事業を位置づけ組織的に展開しようとしていた。これまでにはみられなかった変化である。

東京 2020 大会まで残された時間は 3 年あまり。東京だけでなく、国内の様々な地域で障害者スポーツやパラリンピックに関心が向くような事業を展開し、徐々に人々の関心が高まることを期待したい。そして、パラリンピックのチケットが早くから完売し、会場は満員となり、共生社会実現のメルクマールとなることを祈りたい。その歴史の証人として、エビデンスを積み上げていくことが障害者スポーツ・プロジェクトのミッションだと考えている。これまで同様、今後も皆さんのご協力とご支援を賜りたい。

附録 1

パラリンピアンに対する社会的認知度調査 調査票

Q1. あなたは、以下に示す人物について知っていますか。

	1 知っている	2 聞いたことがある	3 知らない
1. 池 愛里(いけ あいり)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2. 池 透暢(いけ ゆきのぶ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3. 池崎 大輔(いけざき だいすけ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
4. 一ノ瀬 メイ(いちのせ めい)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
5. 浦田 理恵(うらた りえ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
6. 大西 瞳(おおにし ひとみ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
7. 鹿沼 由理恵(かぬま ゆりえ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
8. 上地 結衣(かみじ ゆい)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
9. 木村 敬一(きむら けいいち)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
10. 国枝 慎吾(くにえだ しんご)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
11. 香西 宏昭(こうさい ひろあき)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
12. 齋田 悟司(さいだ さとし)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
13. 佐藤 友祈(さとう ともき)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
14. 杉村 英孝(すぎむら ひでたか)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
15. 鈴木 徹(すずき とおる)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
16. 瀬立 モニカ(せりゅう もにか)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
17. 鳥海 連志(ちょうかい れんし)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
18. 千脇 貢(ちわき みつぐ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
19. 津川 拓也(つがわ たくや)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
20. 辻 沙絵(つじ さえ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
21. 豊島 英(とよしま あきら)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
22. 永尾 嘉章(ながお よしふみ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
23. 永田 裕幸(ながた ひろゆき)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
24. 成田 真由美(なりた まゆみ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
25. 西崎 哲男(にしざき てつお)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
26. 廣瀬 順子(ひろせ じゅんこ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
27. 廣瀬 隆喜(ひろせ たかゆき)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
28. 廣瀬 悠(ひろせ はるか)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
29. 廣瀬 誠(ひろせ まこと)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
30. 藤井 新悟(ふじい しんご)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
31. 藤井 友里子(ふじい ゆりこ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
32. 藤澤 潔(ふじさわ きよし)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
33. 藤田 征樹(ふじた まさき)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
34. 藤本 怜央(ふじもと れお)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
35. 別所 キミエ(べっしょ きみえ)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
36. 前川 楓(まえがわ かえで)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
37. 正木 健人(まさき けんと)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
38. 道下 美里(みちした みさと)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
39. 山田 拓朗(やまだ たくろう)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
40. 山本 篤(やまもと あつし)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Q2. 前問であげた人は、リオデジャネイロ・パラリンピックに出場した選手です。「知っている」「聞いたことがある」と回答された選手の実施競技についてお答えください。

	1 アーチェリー	2 ウィルチェアーラグビー	3 カヌー	4 車いすフェンシング	5 車いすテニス	6 車椅子バスケットボール	7 ゴールボール	8 視覚障害者5人制サッカー	9 脳性麻痺者7人制サッカー	10 シッティングバレーボール	11 自転車
1. 池 愛里(いけ あいり)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2. 池 透暢(いけ ゆきのぶ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3. 池崎 大輔(いけざき だいすけ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4. 一ノ瀬 メイ(いちのせ めい)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5. 浦田 理恵(うらた りえ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6. 大西 瞳(おおにし ひとみ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7. 鹿沼 由理恵(かぬま ゆりえ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8. 上地 結衣(かみじ ゆい)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9. 木村 敬一(きむら けいいち)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10. 国枝 慎吾(くにえだ しんご)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11. 香西 宏昭(こうざい ひろあき)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12. 齋田 悟司(さいだ さとし)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13. 佐藤 友祈(さとう ともき)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
14. 杉村 英孝(すぎむら ひでたか)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15. 鈴木 徹(すずき とおる)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16. 瀬立 モニカ(せりゅう もにか)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17. 鳥海 連志(ちょうかい れんし)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18. 千脇 貢(ちわき みつぐ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19. 津川 拓也(つがわ たくや)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
20. 辻 沙絵(つじ さえ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21. 豊島 英(とよしま あきら)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
22. 永尾 嘉章(ながお よしふみ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
23. 永田 裕幸(ながた ひろゆき)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
24. 成田 真由美(なりた まゆみ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
25. 西崎 哲男(にしざき てつお)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
26. 廣瀬 順子(ひろせ じゅんこ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
27. 廣瀬 隆喜(ひろせ たかゆき)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
28. 廣瀬 悠(ひろせ はるか)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
29. 廣瀬 誠(ひろせ まこと)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30. 藤井 新悟(ふじい しんご)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
31. 藤井 友里子(ふじい ゆりこ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
32. 藤澤 潔(ふじさわ きよし)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
33. 藤田 征樹(ふじた まさき)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
34. 藤本 怜央(ふじもと れお)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
35. 別所 キミエ(べっしょ きみえ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
36. 前川 楓(まえがわ かえで)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
37. 正木 健人(まさき けんと)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
38. 道下 美里(みちした みさと)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
39. 山田 拓朗(やまだ たくろう)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
40. 山本 篤(やまもと あつし)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

Q2. 前問であげた人は、
リオデジャネイロ・パラ
リンピックに出場した選
手です。「知っている」「聞
いたことがある」と回答
された選手の実施競技に
ついてお答えください。

	12 柔道	13 水泳	14 セー リング	15 射撃	16 卓球	17 トラ イア スロ ン	18 馬術	19 パワ ーリ フテ ィン グ	20 ボート	21 ボツ チャ	22 陸上 競技	23 わか らな い
1. 池 愛里(いけ あいり)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2. 池 透暢(いけ ゆきのぶ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3. 池崎 大輔(いけざき だいすけ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4. 一ノ瀬 メイ(いちのせ めい)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5. 浦田 理恵(うらた りえ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6. 大西 瞳(おおにし ひとみ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7. 鹿沼 由理恵(かぬま ゆりえ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8. 上地 結衣(かみじ ゆい)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9. 木村 敬一(きむら けいいち)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10. 国枝 慎吾(くにえだ しんご)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11. 香西 宏昭(こうざい ひろあき)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12. 齋田 悟司(さいだ さとし)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13. 佐藤 友祈(さとう ともき)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
14. 杉村 英孝(すぎむら ひでたか)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15. 鈴木 徹(すずき とおる)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16. 瀬立 モニカ(せりゅう もにか)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17. 鳥海 連志(ちょうかい れんし)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18. 千脇 貢(ちわき みつぐ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19. 津川 拓也(つがわ たくや)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
20. 辻 沙絵(つじ さえ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21. 豊島 英(とよしま あきら)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
22. 永尾 嘉章(ながお よしふみ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
23. 永田 裕幸(ながた ひろゆき)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
24. 成田 真由美(なりた まゆみ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
25. 西崎 哲男(にしざき てつお)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
26. 廣瀬 順子(ひろせ じゅんこ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
27. 廣瀬 隆喜(ひろせ たかゆき)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
28. 廣瀬 悠(ひろせ はるか)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
29. 廣瀬 誠(ひろせ まこと)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30. 藤井 新悟(ふじい しんご)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
31. 藤井 友里子(ふじい ゆりこ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
32. 藤澤 潔(ふじさわ きよし)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
33. 藤田 征樹(ふじた まさき)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
34. 藤本 怜央(ふじもと れお)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
35. 別所 キミエ(べっしょ きみえ)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
36. 前川 楓(まえがわ かえで)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
37. 正木 健人(まさき けんと)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
38. 道下 美里(みちした みさと)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
39. 山田 拓朗(やまだ たくろう)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
40. 山本 篤(やまもと あつし)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

Q3. あなたは、リオデジャネイロ・パラリンピックをテレビやインターネット動画で観戦しましたか？（いくつでも）

- 1. テレビで中継番組を観た
- 2. テレビのニュース番組で観た
- 3. テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た
- 4. インターネット動画で中継を観た
- 5. インターネット動画でニュース番組を観た
- 6. インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た
- 7. (テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した
- 8. テレビやインターネットで観戦しなかった

Q4. あなたが、テレビやインターネット動画で観戦したリオデジャネイロ・パラリンピック競技は何ですか。（いくつでも）※「観戦した」番組には、中継番組、ニュース番組、特集番組を含みます。

- 1. アーチェリー
- 2. ウィルチェアラグビー
- 3. カヌー
- 4. 車いすフェンシング
- 5. 車いすテニス
- 6. 車椅子バスケットボール
- 7. ゴールボール
- 8. 視覚障害者5人制サッカー
- 9. 脳性麻痺者7人制サッカー
- 10. シットイングバレーボール
- 11. 自転車
- 12. 柔道
- 13. 水泳
- 14. セーリング
- 15. 射撃
- 16. 卓球
- 17. トライアスロン
- 18. 馬術
- 19. パワーリフティング
- 20. ボート
- 21. ボッチャ
- 22. 陸上競技
- 23. わからない

Q5. リオデジャネイロ・パラリンピックをテレビやインターネットで観戦して、どう思いましたか。

	1 よく 当て はまる	2 やや 当て はまる	3 あまり 当て はま らない	4 ま った く 当 て は ま ら ない
1. 障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2. 障害者スポーツを直接観戦したい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3. 2020年東京パラリンピックを直接観戦したい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
4. 障害者スポーツを体験したい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
5. 障害者スポーツのボランティアをしたい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
6. 2020年東京パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
7. アスリートとして非常に優れていると感じた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
8. 障害の有無にかかわらず、スポーツは一緒にできると感じた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
9. 障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
10. 障害者と話がしたい、もっと知りたいと思った	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Q6. あなたは日常生活の中で、人々が以下のスポーツを行う光景をみることはありませんか。(いくつでも)

- 1. ウォーキング
- 2. 体操(軽い体操、ラジオ体操など)
- 3. ジョギング・ランニング
- 4. サイクリング
- 5. サッカー(フットサルを含む)
- 6. バドミントン
- 7. 野球(キャッチボールを含む)
- 8. なわとび
- 9. ソフトボール
- 10. グラウンド・ゴルフ
- 11. テニス(ソフトテニスを含む)
- 12. ゲートボール
- 13. ゴルフ
- 14. 上記のスポーツの光景を見ることはない

Q7. あなたは日常生活の中で、障害のある人がスポーツを行う光景をみることがありますか。

- 1. ある
- 2. ない

Q8. あなたが日常生活の中でみる、障害のある人が行っているスポーツの種目をお書きください。複数ある場合は、主なものを最大3つまでお書きください。

- 1. Q8S1【 】
- 2. Q8S2【 】
- 3. Q8S3【 】

Q9. あなたの身近に障害のある人がいますか。(いくつでも)

- 1. 自分自身が障害者である
- 2. 親族に障害のある人がいる
- 3. 職場に障害のある人がいる
- 4. 友人・知人に障害のある人がいる
- 5. 身近に障害のある人はいない

附録 2

パラリンピアンに対する社会的認知度調査 集計表

(%)

Q1	あなたは、以下に示す人物について知っていますか。 単一回答	全体(N)			
			1 知っている	2 聞いたこと がある	3 知らない
1	国枝 慎吾(くにえだ しんご)	2060	20.9	13.1	66.0
2	上地 結衣(かみじ ゆい)	2060	6.8	8.0	85.2
3	成田 真由美(なりた まゆみ)	2060	5.4	5.1	89.5
4	一ノ瀬 メイ(いちのせ めい)	2060	1.9	6.4	91.7
5	辻 沙絵(つじ さえ)	2060	2.4	3.7	93.9
6	山本 篤(やまもと あつし)	2060	1.4	4.2	94.4
7	池崎 大輔(いけざき だいすけ)	2060	1.2	4.0	94.8
8	別所 キミエ(べっしょ きみえ)	2060	1.8	2.6	95.5
9	藤本 怜央(ふじもと れお)	2060	0.8	3.4	95.8
10	山田 拓朗(やまだ たくろう)	2060	1.1	3.1	95.9
11	廣瀬 順子(ひろせ じゅんこ)	2060	1.3	2.5	96.2
12	木村 敬一(きむら けいいち)	2060	1.4	2.3	96.3
13	藤井 新悟(ふじい しんご)	2060	1.0	2.7	96.3
14	鈴木 徹(すずき とおる)	2060	0.7	2.9	96.4
15	池 愛里(いけ あいり)	2060	0.9	2.6	96.5
16	道下 美里(みちした みさと)	2060	1.9	1.6	96.5
17	正木 健人(まさき けんと)	2060	0.9	2.5	96.6
18	浦田 理恵(うらた りえ)	2060	0.8	2.4	96.8
19	廣瀬 誠(ひろせ まこと)	2060	0.5	2.6	96.9
20	瀬立 モニカ(せりゅう もにか)	2060	0.8	2.2	96.9
21	廣瀬 悠(ひろせ はるか)	2060	1.0	2.0	96.9
22	永田 裕幸(ながた ひろゆき)	2060	0.9	2.1	97.0
23	大西 瞳(おおにし ひとみ)	2060	0.7	2.2	97.0
24	香西 宏昭(こうざい ひろあき)	2060	1.0	1.7	97.3
25	池 透暢(いけ ゆきのぶ)	2060	0.7	1.9	97.4
26	鹿沼 由理恵(かぬま ゆりえ)	2060	0.8	1.7	97.5
27	藤田 征樹(ふじた まさき)	2060	0.8	1.6	97.6
28	廣瀬 隆喜(ひろせ たかゆき)	2060	0.9	1.5	97.7
29	藤井 友里子(ふじい ゆりこ)	2060	0.6	1.7	97.7
30	前川 楓(まえがわ かえで)	2060	0.4	1.9	97.7
31	齋田 悟司(さいだ さとし)	2060	0.7	1.5	97.9
32	佐藤 友祈(さとう ともき)	2060	0.7	1.5	97.9
33	鳥海 連志(ちょうかい れんし)	2060	0.6	1.5	97.9
34	津川 拓也(つがわ たくや)	2060	0.7	1.4	97.9
35	西崎 哲男(にしざき てつお)	2060	0.5	1.7	97.9
36	千脇 貢(ちわき みつぐ)	2060	0.4	1.6	98.0
37	杉村 英孝(すぎむら ひでたか)	2060	0.6	1.3	98.1
38	永尾 嘉章(ながお よしふみ)	2060	0.5	1.3	98.2
39	藤澤 潔(ふじさわ きよし)	2060	0.6	1.2	98.2
40	豊島 英(とよしま あきら)	2060	0.5	1.3	98.2

Q2	前問であげた人は、リオデジャネイロ・パラリンピックに出場した選手です。「知っている」「聞いたことがある」と回答された選手の実施競技についてお答えください。 単一回答		全体(N)	%
1	国枝 慎吾(くにえだ しんご)	車いすテニス	701	79.2
2	成田 真由美(なりた まゆみ)	水泳	217	60.8
3	上地 結衣(かみじ ゆい)	車いすテニス	305	56.4
4	道下 美里(みちした みさと)	陸上競技	72	51.4
5	別所 キミエ(べっしょ きみえ)	卓球	92	44.6
6	辻 沙絵(つじ さえ)	陸上競技	125	40.8
7	木村 敬一(きむら けいいち)	水泳	76	38.2
8	一ノ瀬 メイ(いちのせ めい)	水泳	170	32.4
9	鳥海 連志(ちょうかい れんし)	車椅子 バスケットボール	44	29.5
10	正木 健人(まさき けんと)	柔道	71	26.8
11	廣瀬 順子(ひろせ じゅんこ)	柔道	78	23.1
12	齋田 悟司(さいだ さとし)	車いすテニス	44	22.7
13	池 透暢(いけ ゆきのぶ)	ウィルチエアー ラグビー	53	22.6
14	山本 篤(やまもと あつし)	陸上競技	115	22.6
15	廣瀬 悠(ひろせ はるか)	柔道	63	22.2
16	津川 拓也(つがわ たくや)	水泳	44	20.5
17	廣瀬 誠(ひろせ まこと)	柔道	64	20.3
18	大西 瞳(おおにし ひとみ)	陸上競技	61	19.7
19	池 愛里(いけ あいり)	水泳	73	19.2
20	山田 拓朗(やまだ たくろう)	水泳	85	18.8
21	浦田 理恵(うらた りえ)	ゴールボール	85	18.5
22	池崎 大輔(いけざき だいすけ)	ウィルチエアー ラグビー	107	17.8
23	佐藤 友折(さとう ともき)	陸上競技	44	15.9
24	藤本 怜央(ふじもと れお)	車椅子 バスケットボール	87	14.9
25	千脇 貢(ちわき みつぐ)	車椅子 バスケットボール	41	14.6
26	藤井 新悟(ふじい しんご)	車椅子 バスケットボール	76	14.5
27	永尾 嘉章(ながお よしふみ)	陸上競技	38	13.2
28	廣瀬 隆喜(ひろせ たかゆき)	ボッチャ	48	12.5
29	香西 宏昭(こうざい ひろあき)	車椅子 バスケットボール	55	10.9
30	前川 楓(まえがわ かえで)	陸上競技	48	10.4
31	杉村 英孝(すぎむら ひでたか)	ボッチャ	39	10.3
32	鈴木 徹(すずき とおる)	陸上競技	74	9.5
33	永田 裕幸(ながた ひろゆき)	車椅子 バスケットボール	62	8.1
34	藤田 征樹(ふじた まさき)	自転車	50	8.0
35	瀬立 モニカ(せりゅう もにか)	カヌー	63	7.9
36	藤澤 潔(ふじさわ きよし)	車椅子 バスケットボール	38	7.9
37	鹿沼 由理恵(かぬま ゆりえ)	自転車	52	7.7
38	西崎 哲男(にしざき てつお)	パワーリフティング	44	6.8
39	藤井 友里子(ふじい ゆりこ)	ボッチャ	48	6.3
40	豊島 英(としま あきら)	車椅子 バスケットボール	37	5.4

Q3	あなたは、リオデジャネイロ・パラリンピックをテレビやインターネット動画で観戦しましたか？(いくつでも)複数回答	%
1	テレビで中継番組を観た	30.3
2	テレビのニュース番組で観た	46.8
3	テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た	13.0
4	インターネット動画で中継を観た	1.5
5	インターネット動画でニュース番組を観た	2.0
6	インターネット動画で選手・競技を紹介した特集番組を観た	0.9
7	(テレビやインターネットの)その他の方法で観戦した	0.6
8	テレビやインターネットで観戦しなかった	39.5
	全体(N)	2060

Q4	あなたが、テレビやインターネット動画で観戦したリオデジャネイロ・パラリンピック競技は何ですか。(いくつでも)※「観戦した」番組には、中継番組、ニュース番組、特集番組を含みます。複数回答	%
1	水泳	41.1
2	車いすテニス	40.1
3	陸上競技	32.6
4	柔道	29.5
5	卓球	23.7
6	車椅子バスケットボール	22.5
7	ボッチャ	9.9
8	ゴールボール	6.8
9	視覚障害者5人制サッカー	5.2
10	ウィルチェアーラグビー	5.1
11	パワーリフティング	3.2
12	カヌー	2.9
13	トライアスロン	2.9
14	自転車	2.6
15	アーチェリー	1.8
16	車いすフェンシング	1.8
17	シットイングバレーボール	1.8
18	射撃	1.4
19	セーリング	0.9
20	馬術	0.9
21	脳性麻痺者7人制サッカー	0.8
22	ボート	0.8
23	わからない	15.2
	全体(N)	1247

(%)

Q5	リオデジャネイロ・パラリンピックをテレビやインターネットで観戦して、どう思いましたか。 単一回答	全体(N)	1	2	3	4
			よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
1	障害者スポーツをテレビやインターネットで観戦したい	1247	5.9	37.1	44.4	12.6
2	障害者スポーツを直接観戦したい	1247	3.8	22.5	55.2	18.5
3	2020年東京パラリンピックを直接観戦したい	1247	9.1	26.1	46.6	18.1
4	障害者スポーツを体験したい	1247	4.3	16.8	54.1	24.8
5	障害者スポーツのボランティアをしたい	1247	3.9	17.1	56.8	22.2
6	2020年東京パラリンピックにボランティアとしてかかわりたい	1247	3.3	17.2	52.7	26.9
7	アスリートとして非常に優れていると感じた	1247	28.2	41.3	22.3	8.2
8	障害の有無にかかわらず、スポーツと一緒にできると感じた	1247	21.6	43.4	25.7	9.4
9	障害者への偏見がなくなった、身近な存在に感じた	1247	15.4	46.3	29.0	9.3
10	障害者と話したい、もっと知りたいと思った	1247	7.9	34.8	46.3	11.0

Q6	あなたは日常生活の中で、人々が以下のスポーツを行う光景をみることがありますか。(いくつでも) 複数回答	%
1	ウォーキング	67.1
2	ジョギング・ランニング	58.8
3	サイクリング	34.3
4	野球(キャッチボールを含む)	27.6
5	体操(軽い体操、ラジオ体操など)	24.4
6	サッカー(フットサルを含む)	22.9
7	テニス(ソフトテニスを含む)	20.6
8	ゲートボール	16.5
9	ゴルフ	12.9
10	グラウンド・ゴルフ	10.0
11	なわとび	8.1
12	バドミントン	7.3
13	ソフトボール	6.2
14	上記のスポーツの光景をみることはない	20.4
	全体(N)	2060

Q7	あなたは日常生活の中で、障害のある人がスポーツを行う光景をみることがありますか。 単一回答	%
1	ある	6.0
2	ない	94.0
	全体(N)	2060

Q8	あなたが日常生活の中で見る、障害のある人が行っているスポーツの種目をお書きください。 複数ある場合は、主なものを最大3つまでお書きください。 3つまで回答	件
1	バスケットボール	28
2	テニス	21
3	ジョギング・ランニング	20
4	サッカー	9
5	陸上競技	8
6	水泳	8
7	ウォーキング	8
8	サイクリング	6
9	ゲートボール	5
10	卓球	5
11	野球	3
12	バレーボール	3
13	その他	23
	全体	152

Q9	あなたの身近に障害のある人がいますか。(いくつでも) 複数回答	%
1	自分自身が障害者である	2.7
2	親族に障害のある人がいる	11.0
3	職場に障害のある人がいる	3.5
4	友人・知人に障害のある人がいる	8.7
5	身近に障害のある人はいない	76.1
	全体(N)	2060

**2016（平成28）年度
障害者スポーツの振興と強化に関する調査研究報告書
- テレビ放送、選手認知度、大学による支援に注目して -**

2017年3月 発行

発行者 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

Yamaha Motor Foundation for Sports (YMFS)

〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500

TEL 0538-38-9827 FAX 0538-32-1112

I S B N 978-4-9907079-6-5

© ヤマハ発動機スポーツ振興財団

本報告書の内容を引用された場合、その掲載部分の写しを YMFS にご送付ください。

公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports

ISBN 978-4-9907079-6-5

2016（平成28）年度

障害者スポーツの振興と強化に関する調査研究報告書

- テレビ放送、選手認知度、大学による支援に注目して -